

遠山川流域の民俗と

ふるさとイメージの創造

浮葉正親

目次

はじめに	3
第一章 遠山谷の自然と水に対する信仰	4
第二章 川と人々の暮らし	8
(1) 水害との戦い	8
(2) 思い出の中の遠山川	11
(3) 川をめぐる伝説	15
第三章 近代化の爪痕 — 王子製紙の伐採事業を中心に —	20
(1) 遠山共有山の前史と共有山騒動の背景	20
(2) 王子製紙の伐採事業と人々の生活の変化	23
(3) 近代化の爪痕	24
第四章 霜月祭伝承とふるさとイメージの創造	26
(1) 共有山騒動と一揆伝説	26
(2) 郷土史家の活動と霜月祭伝承の変化	30
(3) 遠山常民大学の活動と霜月祭研究の深まり	36
第五章 さまざまなふるさとイメージの模索	41
おわりに	47

はじめに

はじめは遠山谷を訪れてから、すでに十数年の歳月が流
れようとしています。とくに大学から大学院にかけての六
年間（昭和五四年から六〇年）は、長期休暇には必ず遠山
を訪ね、上村の下栗を中心に、霜月祭をはじめとする年中
行事や山の神の信仰、生業の変化などを調べていました。

安曇野の平野部で育った私にとって、厳しい山の自然と向
かい合って暮らす遠山の人々のたくましい姿は大きな驚き
でした。遠山谷での経験は、私がその後民俗学や文化人類
学という学問の世界に足を踏み入れるきっかけになったわ
けですし、遠山の方々には本を読むだけでは知ることので
きない多くのことを教えていただきました。

その後韓国の大学で約三年間、日本語教師生活を送りな
がら、遠山での調査の成果をいくつかの論文にまとめまし
たが、まだ教えていただいたことのほんの一部を発表した
にすぎません。それに加え、四年前古屋の大学に職を得
てからは雑事に追われ、いつの間にか遠山に足が遠のいて

いました。

今回、『語りつぐ天竜川』のシリーズに、川を中心にし
た遠山谷の民俗についての執筆を依頼され、かつての調査
ノートを見直してみたのですが、主に下栗で山の民俗を中
心に調査を続けてきた私にとって、川の民俗が盲点になっ
ていることに気づきました。そこで、若干の補充調査をす
るとともに、私と同じ時期に上村の中郷で調査を行ってい
た大学時代の級友・南真治君の調査ノート、『南信濃村
史・遠山』や『上村村誌・民俗篇』などの刊行資料を参考
にしました。また、この本の後半では、遠山谷の近代化に
大きな爪痕を残し、昭和四〇年代まで頻発した遠山川氾濫
の大きな原因となった王子製紙の森林伐採事業とその影
響、そして霜月祭や遠山土佐守伝承を媒介にして形成され
た「ふるさと」イメージの創造に焦点を当ててみました。

どのテーマも大きな問題であり、限られたスペースのな
かで十分に展開できなかった感も否めませんが、この本が
遠山の方々へのせめてもの「恩返し」になればと考え、あ
えて公表することにしました。多くの方に読んでいただけ
るよう平易な文章を心がけましたので、ご意見、ご感想な
どお寄せいただければ幸いです。

第一章 遠山谷の自然と水に対する信仰

南信濃村和田の出身で、日本の「常民」史や柳田国男研究に大きな足跡を残している後藤総一郎氏は、遠山谷に向かう人々の心象風景を次のように描写しています。（南信濃村編『南信濃村史・遠山』一九七六、一頁）。

遠山の表玄関ともいえる国鉄飯田線平岡駅を降りて、幾重にも重なりあう山と山が間近に向き合う、V字状の谷間を流れる一条の遠山川に沿って、それと並んで切り開かれた一条の道をたどって遠山に向かうとき、人は誰しも思うであろう。

果たして、この谷間の上流に人里があるのだろうか。まして、はじめてこの地を訪れる旅人は、誰もがその感慨を抱くという。

遠山は、平の大地をもたない、山里である。山の急斜面を切り開いて生成した山村である。遠山はまさに谷間の里である。

昭和五四年の夏、初めて遠山を訪れた私も、遠山に向かうバスの中で同じような感慨にとらわれました。とくに和田から木沢を越え、上村川と遠山川の合流点にさしかかり、南アルプスから張り出した大きな尾根が目の前に迫ったとき、その尾根の上に集落が点在するのを眺めながら、「ああ、あんな高いところにも人が住んでいるんだ」と驚いたのをよく覚えています。

その後、その尾根の南斜面に位置する上村の下栗を調査地に選んだわけですが、川から遠く離れた下栗では、水の確保に苦労したという話をよく聞きました。下栗の半場・本村地区には、かつて三つの井戸が縦に並んであり、約五〇戸の家々が利用していました。昭和一年に刊行された信濃教育会編『下伊那の地誌・遠山地方』（山村書院・一九三六、四四〇四五頁）は、当時の水汲み風景を次のように報告しています。

水を持ってこの斜面を登ることは仲々骨の折れる仕事である。そのため各戸皆一升五合程入る楕円形の水樽を造り、之に水を満し背負子に負って坂を登るのである。かく多大の労苦を要する水であるから貴重にされることは勿論で、四回運べば一家一日分の使用に足るとのこと



写真1 山の神・水神碑とオタカラ(上町)

である。この水運びは全く女性の仕事で、水樽を背負って坂を登る女の姿は下栗ならでは一寸見られぬ風景である。但し樽を負わなければならぬ程困難を感じない所では角桶を二ヶに水を満たし天秤棒を担いで行く。かく水が少ないから洗濯用水には天水を利用してある家さえある。

下栗の三つの井戸は同じ水脈から湧出したものですが、水の出る場所には当然地滑りの危険がつきまといまふ。実際、真ん中の井戸(「大井戸」)のすぐ近くの斜面が昭和四

〇年に崩落しています。下栗では、「石のコケテ来ない(落ちてこない)」ところ、水の近いところ、風の当たらないところ」に家が建てられていると説明されます。その言葉には、山地の厳しい自然の力が発現する場所を避け、少しずつ生活の領域を広げていくという山村の暮らしの原点をうかがうことができます。

遠山谷には数多くの山神碑が残っていますが、そのなかには「山の神・水神」と二つの神の名が並んで刻まれているものが少なくありません。また、山神碑の前ばかりではなく、猟師や山師(山林労働者)が山中で山の神を祀る時などにも、二本のオタカラ(幣束)を捧げるものとされています。赤と白の半紙を二つ折りにし、竹串にはさむ簡単なオタカラで、赤が山の神を、白が水神を表すといわれています(写真1参照)。

昭和二〇年代から三〇年代にかけての遠山谷の山の神信仰を克明に報告した松山義雄氏は、山の神と水神の関係を次のように指摘しています(『山国の神と人』未来社・一九六一、一三六〜一三七頁)。

台風や集中豪雨が凄惨な破壊力をふるって荒れ狂うとき、遠山谷のような峡谷地帯にみられる特異な現象は、

必ず水荒れ―洪水と、山荒れ―山抜けとが、手をたずさえて同時に襲いかかってくることで、これは平地人の経験では想像のつかないことでした。堤防の決壊はもとより、人命を奪い、家屋を押し流す大自然の暴力を宿命視する以外に、有力な抵抗を持たぬとしたら、山民に残された手段はただ荒ぶる神をまつり、しずめることだけに局限されます。こうした事情が、山と水が関連する箇所、つまり山荒れ・水荒れが同時に起きる場所に、“水神・山の神”の碑が山峡の橋のたもとに、あるいは川を見おろす山裾や、川渚などに見られるのはこのためですが、もう一か所、水源となる山にもみられるのは、山の神と水の神とがここで結びあって、水の供給源となることを物語るものにほかなりません。

下栗の上方の尾根を登り、シラビソ高原に向かう林道をそれて熊笹の繁る道を行くと「お池」に出ます。この「お池」は下栗よりも中郷に近いことから「中郷お池」とも呼ばれていますが、かつては雨乞いの池として信仰を集めていました。下栗でお盆に行われている「かけ踊り」はかつての雨乞いの踊りを年中行事化したものだといわれていますし、下栗の霜月祭では「龍頭（タツガシラ）」と呼ばれ



写真2 下栗の「龍頭（タツガシラ）」

る面が登場します（写真2参照）。この面は池大明神の化身で、荒れ狂う「龍頭」を猿の面をかぶった子どもが二本の棒でたたき、傷ついた「龍頭」がのたうちまわる所作が演じられています。現在では、獅子舞のように面の口を開けたり閉じたりしていますが、かつては面の口を開けると大水が出るといわれ、口を閉じたままで演じられたものだったようです。「お池」のもうひとつの登り口である中郷の新島には、池大明神と宇佐八幡・不動明王を祀ったお宮があります。現在では祀る人もなく、板戸の痛みがひどく床板も抜け落ちていますが、板戸の内側には次のような文章が書かれています。

嘉永元年申ノ八月八日よりあまごい仕候。人足二十六あり。九日まで相つとめ候。

明治四十四年旧六月二十三日より二十六日迄雨乞い致し、六月三十日雨降りまして御祭礼七月一日に致し候。

祐宜として実際に雨乞いの体験をしている中郷の坂八十一氏によれば、このお宮は池大明神の前宮だったのではないかとことです。また中郷には「池城」と呼ばれてい

る場所がありますが、そこには次のような伝説が語られています（南真治調査・坂八十一氏へのインタビュー）。

昔、明神様は池城で暮らしていました。そのうちに人々が盛んに焼き畑を作り始めたので、毎日毎日煙たくて仕方がありませんでした。その上、池の周りが焼き払われて明るくなってしまったので、明神様はこの場所に住みにくくなったといって、池の水を持って高い場所にある今のお池に引越してしまいました。それ以後は池城には水がなくなりました。

池城には現在でも四・五尺の石がありますが、池に水があり、明神様が住んでおられたときには、明神様の姿がこの石に映り、それを見て明神様が化粧をしたことから、その石は「鏡石」と呼ばれています。

下栗でも、池大明神はもともと須沢のリケン沢に住んでいて、中郷の池城と同じように焼き畑の煙に追われ、今の「お池」に移ったといわれ、池大明神が住んでいた場所は「ケブッタが池」と呼ばれています。

このように、水をコントロールすると考えられていた「お池」の神が人間によって住む場所を奪われるという伝

説は、山の自然そのものの象徴である山の神⇨水神の領域を人間が少しずつ奪い続けてきた記憶を伝えるものではないかと思えます。そのような人間の営みに対して山の神⇨水神はしばしば手痛いしっぺがえしをしました。遠山谷の山の神信仰には、祟り神としての側面が強く、山の神の「休み木」を伐って病気になったという話をよく聞きます。また猟師や山師として山に入る人々には厳しい禁忌が課せられていました（遠山谷の山の神信仰については、松山義雄氏の『山国の神と人』に詳しく紹介されていますし、『信濃』の三九巻第三号と四三巻第七号に、私も論文を発表したことがありますので、そちらを御覧ください）。

遠山谷の近代史は山林の伐採による水害の頻発、そしてそれとの戦いという、山の神⇨水神の「祟り」とそれへの「鎮め」の歴史だったといっても過言ではありません。それでは次に、遠山谷の水害の歴史を紹介し、人々の暮しと川との関係を報告していきましょう。

第二章 川と人々の暮らし

(一) 水害との戦い

遠山谷は総面積の九八%を山林が占める山岳地帯です。南アルプスの赤石連峰に源を発する遠山川は、急峻な谷を下る無数の沢の水を集め大きな流れとなり、天竜川に注ぎ込んでいます。現在では、ダムや堰堤が建設され、護岸工事も進んで一見おだやかに見えるこの川も、昭和四〇年代までは大雨が降ると必ず洪水を引き起こす荒々しい川でした。

実は、私も一度だけ遠山川の上流に行ったことがあります。昭和六〇年の夏、修士論文作成のため、約三か月間下栗に滞在していたのですが、どう見ても暇そうな私を見かねたある人の紹介で、中部電力が北又渡に建設したダムの水量調査のアルバイトをすることになったのです。その家の息子さんと二人で柿の島の吊り橋を渡り、待っていた車に同乗して、北又沢をさかのぼりました。行き止まりから

は徒歩で、その間何回か徒渉を繰り返して、かつての森林鉄道の橋が見えるところまで行きました。ところが、その日の仕事を終え、いざ帰る段になったとき、突然夕立がありました。夕立は一時間ぐらいで上がったのですが、来る時には膝のあたりだった川の水が倍以上になり、ゴウゴウと音を立てています。激しい流れに砂が流され、むきだしになった石の上に足を踏み出すとき、それこそ身の縮む思いでした。ベテランの技師が徒渉地点を正確に読み取り、私が渡る時は下流で待機してしてくれたので無事に帰れたのですが、あのとときの恐怖は今でも忘れられません。

『南信濃村史・遠山』によれば、遠山森林鉄道は昭和一五年に工事が始まり、昭和一九年に大沢渡までの区間が完成し、昭和三二年に西沢渡まで軌道を伸ばし、昭和四六年に廃止されています。遠山川と上村川の合流点に当たる梨元には貯木場が設けられ、戦後はトラックによる木材の輸送が行われたのですが、戦前とくに王子製紙の大規模な伐採事業が行われた明治時代半ばから大正時代にかけては、ヒヨウと呼ばれた流送人夫によって木材の搬出が行われていました。王子製紙の伐採事業については、次章で詳しく触れますが、遠山川の度重なる氾濫がこの事業の乱伐による人災であることは明らかです。

大正八年、南アルプスの聖岳から遠山川の上流を下った登山家の冠松次郎は、著書『溪(たに)』(中公文庫・一九七九、一七三頁)のなかで、次のように述べています。

西沢渡から広い溪間を三時間ほどで易老渡の上手に出た。ここでは兩岸が深く高く、流れは急に狭くなっている。やや深い徒渉を数回すると、行く手に橋が見える。右岸が悪いので左岸にうつるとその下に出た。(中略)二十数年前この谷に伐採が入ったときに拓いた道が、崖の横に断続的に痕をとどめている。なまじい道を造つたため、地盤は弛んで川に向かって急に落ちていく。悪場つづきを冷や汗をかきながら、灌木や笹にすがり、岩に抱きつくようにして暫く行ったが我慢できずに谷へ下り、左岸にうつったが、そこもまた道跡が崩れ、曾てあった栈橋は至る処で朽ちてぶら下がっている。

『南信濃村史・遠山』によれば、王子製紙の伐採事業開始の翌年の明治三〇年と事業が撤収した大正一一年に大洪水が起こっています。その後、被害が大きかった和田では、大規模な護岸工事を行い、それまで中の島をはさんで流れていた遠山川を一本にし、一四町歩におよぶ新田を開

発したり（昭和九年完成）するなど、水害との戦いが繰り返されてきました。

ところが、水魔の勢いは衰えるどころか、戦後も遠山の人々を苦しめ続けました。『南信濃村史・遠山』や後藤総一郎氏の『遠山物語』（信濃毎日新聞社・一九七九）によれば、戦後の水害の記録は左のようなものです。

昭和二〇年一〇月四日（枕崎台風）

昭和二三年六月一九・二〇日（集中豪雨）

昭和二五年六月一日（豪雨）

昭和二八年七月一九日（キティ台風）

昭和三四年九月二六日（伊勢湾台風）

昭和三六年六月二六日（集中豪雨）

昭和四〇年九月一七日（二四号台風）

昭和四三年八月二九日（一〇号台風）

このように水害が頻発したのは、直接的には度重なる集中豪雨の来襲が原因ですが、後藤総一郎氏も指摘しているように、戦時中に飛行機や船舶の材料となる大量の木材を搬出したことや営林署の奥地伐採、ダムの建設による河床の上昇もその原因となりました。昭和三八年に遠山谷を訪

れた民俗学者・宮本常一も『私の日本地図1・天竜川に沿って』（同友館・一九六七、一五六頁および一六三頁）のなかで、次のように指摘しています。

さて平岡にダムができてから遠山川の谷にはにわかに土砂の堆積がはじまった。（中略）平岡から遠山川にそってさかのぼってゆくと、川原は白々とした砂で埋められ、旧道や橋はその砂の中に埋まってあたらしい道が川原の上につけられている。そしてもう溪流というようなものではなくなっている。

このあたり（上町）になると、川床のほうが道路面より高いほどになっている。いつ大きな災害がおこるかかわからない状態である。川床が高くなれば堤防を高くし、堤防を高くすれば水害が起こったときの被害が大きくなる。そういう悪循環がここにもおころうとしていて恐ろしいような気がする。

実際、昭和四〇年の水害は戦後最大のもので、中橋、中央橋、押出橋の三つの橋を押し流し、遠山中学校を半壊させ、校庭が土砂で埋まるほどのものでした。『南信濃村

史・遠山』に転載された当時の村長・深尾貫一郎の手記『災害復興記録』によれば、民家の全壊流出五三戸、半壊床上床下浸水九〇余戸、被害総額八億円という甚大な被害をもたらしました。幸い人身被害は軽傷者数名を出しただけに終わりましたが、和田の人々は屋根の上に逃れ、水の退くのを待ったといわれています。

以上のように、遠山の近代史は水害との戦いであり、前章でも指摘したとおり、山の自然のバランスを壊す人間の営みの結果にほかなりません。しかし、遠山の場合、災害の主な原因は、王子製紙の伐採事業や戦時中の木材搬出など、外部の資本や権力によってなされた開発にあります。それによって人々の生活が豊かになったとはいえず、その代償はあまりにも大きかったと言わねばならないでしょう。

(二) 思い出の中の遠山川

前節では、遠山川の氾濫の歴史を紹介しましたが、川は人々の生活を脅かすだけのものではありません。昭和五〇年代の終わりから六〇年代に初めにかけて、遠山では老人クラブが主体となって、『高齢者の語り―ふるさとへの伝言』（南信濃村）と『甦る上村の自然と人達』（上村）を刊行しています。以下、それぞれの本に書かれた遠山川の思

い出を抜粋してみます。

(a) 子供の頃の遠山川

子供の頃、川に行くと、魚のおいがした。うなぎもいた。アユもいた。石の下に大きなクマガジカも、トウバリも泳いでいた。

おじいさん、おばあさんが、あのふちにはカーランベ大きな蛇（じゃ）がいると言っていた。今は、そのフチもなくなってしまう。片輪になった川からは、あのふるさとのおいは消えた。

（『高齢者の語り』第二集・宮下コロヨ）

(b) 昔を語る座談会

間沢 それから水あびをよくやったな。

松下 シット岩、コウモリ岩、ベベ岩とか、チンボ岩という所でよくやったものだ。ベベ岩というのは今の堰堤の所にあつて、真ん中にくぼみがあつても雨水がたまっていた。

間沢 あの時分はパンツはなくてフルチンだった。

成沢 前沢今男さは水くぐりの名人で、水中を歩いたり、五〇メートル位くぐったりした。（中略）

松下 寒くなると川原の石や砂に腹ばいになって体をあ

たためたものだ。秋になると島川原という所が

あって、ぐみがいっぱいになっていた。あけび取も
やった。

『高齢者の語り』第二集・前沢貞之輔ほか)

(c) 喧嘩岩

けんか岩というと誰も知らぬ人がないし、それぞれの
思い出が残されている事と思う。見事な大岩でもある。

子どもの頃はみんなこのけんか岩で水浴びをしたり、魚
取りをしたり、一日中子どもの遊び場であった。

水の流れが穏やかで、程よい深い所があり、其の上、

栗下方面の水田の取り入れ口で、牛糞とか、石積みで川
の流れをせき止めたので、水深も増して安全な遊び場で
あった。(中略)

上村川には、大きな岩の割れ目があり、一段と深く、
大きな渦巻きも出来て、割れ目の間から見ると魚が列を
なして泳いでいるのが見えた。

下流の方では、女の子達が岸边や水の溜り場で手拭
いを広げ、二人で両端を持って、針子(ドバリとも言っ
た)というアカ魚の稚魚を取って、カンやビンに入れた

り、針子を吞むと良く泳げるという言い伝えがあり、み
んな目を丸くして呑んだりしていました。

夕方になると農家の人達も麦打ち等で芒や埃と汗で体
の汚れたのを落としに「一寸一浴びせにゃ」と言ってお
へ飛び込み汗を流して帰ったものだった。

あたりが静かになると、浅瀬にアカ魚が産卵のため集
まって真黒に固まる時があった。その時を見計らって投
網打ちが来て、バサリと網を打って魚籠(ビク)に一杯
取って行った。

上村川には魚が豊富で、特に「カジカ」「アカ魚」が
多く、アメ、ウナギ、アユ等もいた。昔は堤防や堰堤が
なかったので、天竜川からどんどん上がってきた。

川原も狭くて、川端には柳や雑草が青々と茂り、川原
イチゴもたくさんあった。雨が降って大水が出ると、魚
が雑草の中に逃げ込んでいたので、竹を割って編んだセ
リで魚籠が重くなる程取れたものだった。

『甞る上村の自然と人達』第一集・鎌倉文司)

右のような光景は、現在七〇歳以上の人々が子供の頃に
体験したもので、人々の生活にうるおいを与えていた遠山
川の姿を知ることができます。(a)で語られているよう

に、かつての遠山川を知る人々にとって、ダムや堰堤で区切られ、岸をセメントで固められた現在の川の姿は「片輪」に見えるのでしょうか。「片輪」となる以前の川は、「カーランベ」(カップ)や「大きな蛇(じゃ)」が棲む川でもあったのです(川をめぐる伝説については次節で紹介します)。

(b) や (c) の語りからは、川に屹立する大きな岩にさまざまな名前が付けられていたことを知る事ができます。これらの名前は地図に載ることもなく、流路の変化や道路工事によって岩そのものがなくなってしまった今日では、人々の記憶の中だけで生き続ける地名です。(b) の「べべ岩」は「真ん中にくぼみがあって、いつも水がたまっていた」といわれるように、女性性を連想させたのでしようし、「チンボ岩」も同様でしょう。(c) の「喧嘩岩」の由来については、地元の郷土史家・山口儀高氏が『甞る上村の自然と人達』の第二集(一〜三頁)で次のような説を紹介しています。

山口氏によれば、現在上村川の流路は、上村小学校の前で大きく西側に曲がっていますが、明治元年の山崩れ以前には、上村小学校の下を南信濃村の赤沢までまっすぐ流れていたということです。江戸時代の末期に作成された上村

の絵図面には、現在の流路には田畑があり、その東側を川が流れていたことが分かるそうです。さて、「喧嘩岩」の名前のいわれについては、山口氏は次の二つの伝承を紹介しています(括弧内は引用者注)。

① その(明治元年の山崩れ)後、西側の地主が足並みを揃えて今一度川を東へ移そうと相談した。流れが西へ移った最大の原因はあの大岩だ。あれを割ってしまえば、流れは自然に東に移るし、堤防もそんなにでっかいものもいらぬし、ということになった。

このとき、東の地主(地先権者)一同、ひとたび西へ流れた川をまた東へ戻すとはもっての外と反対し、大岩は絶対に割らせないと氣勢を上げ、これが長いこと論争になったので(「喧嘩岩」という)。

② またある人の言うには、あの岩見通しの境界争いがあって、甲乙がはげしく言い争ったのでケンカ岩という。

右の①②どちらの説を取るにせよ、川沿いの限られた土地の所有権や利用をめぐる、人々の間で熾烈な争いが繰り広げられたことが分かります。このような歴史を秘めた

「喧嘩岩」も(c)の鎌倉氏や右の山口氏の文章が書かれた数年後、国道工事のために姿を消してしまいました。

現在では見ることでなくなつた岩や淵、川原の名前の由来を調べることで、遠山の人々の暮らしとその歴史をより深く知ることができるようになります。

なお、(c)の鎌倉氏の文章は、遠山川のかつての漁猟の様子を知るうえで貴重な記録です。私も含めて遠山谷を訪れた研究者の多くは、豊富な山の民俗に目を奪われ、川の民俗にあまり注目してきませんでした。ただ、早稲田大学の日本民俗学研究会が一九八六年に刊行した『木沢の民俗』(二二頁)には、遠山川の漁猟について比較的詳しい報告がありますので、ここではそれをそのまま転載し、今後の課題とさせていただきます。

12 川 漁

以前は、木沢でも魚の漁を専門にする者も一人か二人だけだった。取れる魚は主として、いわな、あめのうお、赤魚等であり、後述するような方法で漁をし、それらあぶるようにして焼いたものを、飯田などに運んで売った。木材出荷で和田が非常に賑っていた頃には、その料理屋などへ出すこともあった。

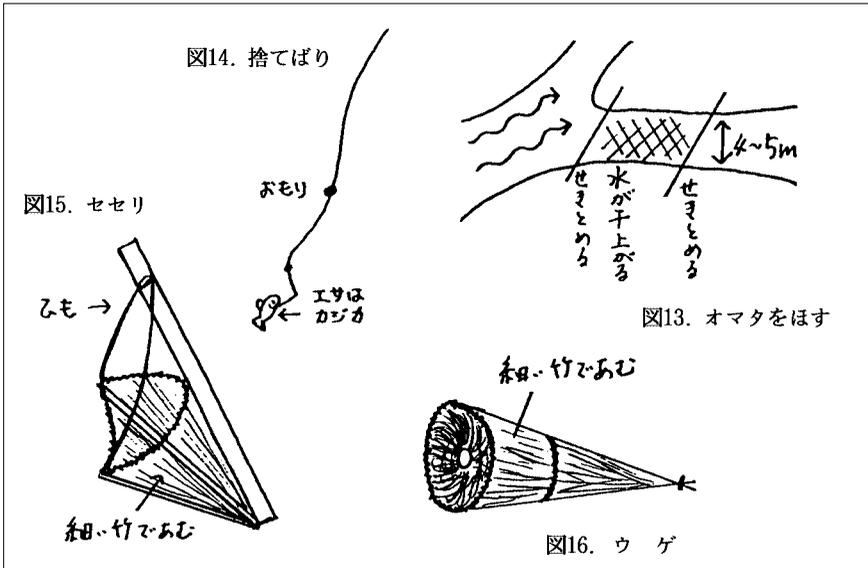


図1 遠山川の漁法と漁具 (早稲田大学日本民俗学研究会『木沢の民俗』より転載)

魚をとるには次の四つの方法が多く使われた。

*オマタをほす 図13のように、川がふたまたに分かれている地点で、四、五メートルほどの片方の川をせきとめ、魚を閉じ込める。その水が少なくなった時には、魚がぴちゃぴちゃとはねて、簡単に手づかみでとれるという。

*捨てばり 図14のような釣り糸におもりと釣り針をつけ、餌にはかじかをつけた仕掛けを何本もつくり、夜中に流れの穏やかな場所を見はからって、置き針をする。その翌朝その仕掛けを引上げて見ると、やまめ、いわな等がかかっている、時にはうなぎが釣れることさえあったという。

*セセリ 図15のような仕掛けを竹を使って作り、大雨が降った後など、川に水が出て荒れたりしている時に、仕掛けて漁をする。この仕掛けの口の上を上流側に向けて置き、上流から足や手を使って、岸や石のかけにいる魚を中に追い込んでいく。かじかや鮎などが取れたという。

*ウゲ セセリと同じように竹を使って、図16のような仕掛けを作り、やはり口を流れに向ける。一度魚がこの中に入ると、外には出られないような仕組みになっている。

る。仕掛けの大きさはセセリと同様にいろいろある。

(三) 川をめぐる伝説

この章の最後に、遠山川の伝説を列挙しておきます。この「語りつぐ天竜川」のシリーズには、すでに笹本正治氏の『天竜川の災害伝説——熊谷家伝記』を中心に——や『天竜川の災害伝説』が収められていますので、淵伝説の分析についてはそちらを参考にしていただいて、ここではこれまでの調査や刊行物に記された伝説を列挙します。

(a) カワランベ

深瀬の巻口にはカワランベがいて、子供が泳いでいると、年寄りがおへそをとられるぞと叱った。

(中郷・野村富貴子氏・南真治調査)

カワランベはスリバチをかむった恰好をしている。川で水遊びをしていると、カワランベにぬかれるといわれた。子供の頃、カワランベに肛門をぬかれて死んだ人がいる。(中郷・坂八十一氏・南真治調査)

カワランベとは川獺(かわうそ)のことである。小道

木や大島で水浴びをしていると、川原の涼しい石の上に座ってドンブリのようなものを被ったカワランベがそれを見ていて、人の足を引っぱって川の中で引きずり込んでしまうという。実際に、大島に住んでいた江戸屋の娘二人が盆の十六日に川へ引きずり込まれて死んだといわれている。

〔木沢の民俗〕九〇頁〕

(b) 水上(みなかみ)の蛇

水上の方には、耳のある蛇がおるちちゅういわれたんもんだに。昔、あるじいさんが、その蛇を見たちちゅうことだが、そうしたら、そのじいさんは、それ以後は家から一步も外に出歩かなだちちゅうに。村の衆は、水上の蛇は、山の神様のお使いだもんで、それを見たじいさんは恐ろしくなちちまって、どうかしちまっただちちゅうって言い合ったことがある。その後、そのじいさんを見た人はいないちちゅうことだ。

〔上村村誌・民俗篇〕三三三頁〕

(c) 椀貸し伝説

実際あったんだかどうか、御祝儀やお甲いで人寄りのあるとき、人数を言うとな人数分の膳だの椀をお借りし

て、はらう(お返しする)と淵の中に沈んでいった。それで膳と椀がこわれたのをはらったところ、こわれた膳と椀は沈んでいかなかった。そのような伝説が、万場クツウチバの対岸の森林組合倉庫の近くの巻口になった淵にあった。またツベタ沢の上の七つ釜や池城のお池にも同じような伝説があった。

(中郷・坂八十一氏・南真治調査)

中郷のつべた沢ん所に、釜の形をした淵が七つあるんだに。昔、ここじゃあ、お客をするときに椀を貸してくれたちちゅうことだに。

また、雨乞いをする時に、祢宜様や近所の人が椀を持って洗ってくると、雨が降るちちゅういわれとるに。

〔上村村誌・民俗篇〕三四一頁〕

上町の諏訪宮の前に、輪淵ちちゅう淵があるんな。昔そこでお祠が渦の輪の中にあっただもんで、鳶口で引き上げたことがあるんだに。だけえど、その淵は、お祠を引き上げたあとも、いつまでも渦を巻いとったんだに。

また、この輪淵の渦ん中へは、付近の人たちが困ったことがあった時に、紙に願いごとを書いて入れると、そ

の願いが叶ったもんだ。椀を貸してくれるっちゅうこともあったんだに。けえど、ある時に、この輪淵で借りたお椀を欠いちまった人がおつて、そのまんま淵の上から入れたら、それ以後は椀を貸してくれなんだんな。

〔『上村村誌・民俗篇』三四一頁〕

注 「お祠」とは小さな祠のことで、遠山では「オタマヤ」「オチョウヤ」と呼ばれます。

おわん淵〈a〉 昔、大淵という淵があった。小道木の山崎イチゴロウという人が、信心して祀っていた。村に祝い事や寄り合いがある時など、一、二のおわんがこわれたまま返したら、もうそれっきり貸してはくれなかった。

おわん淵〈b〉 昔、小道木にわんこ淵という淵があった。明治年間が残っていて、非常に恐ろしい淵であった。村人がそこに行くと、おわんを貸してくれた。ある時、村人のひとりがおわんを一つなくして返した。するとそれ以来一度とおわんを貸してくれなくなったそうである。

〔『木沢の民俗』八六〜八七頁〕

(d) 中郷の流れ宮

中郷の分校だった所の近くに、大きな岩があって、諏訪明神を祭ったんだに。これが、いつのことだったか、大洪水にあって流されちまったことがあるんな。そうして、今の諏訪宮ん所まで流れちまったもんで、それ以後、中郷に祭ってあった明神様ん所を流れ宮っちゅうようになつたんだに。諏訪宮には、なぎがまが二本お祭りしたつて、上町とその付近の人たちが、御射山の祭りとして八月二十五・二十六日にお祭をするんな。

また、水害に出あったときにゃあ、祢宜様がなぎがまを持って川へ行って、川すじをひくと、川すじがそのとおりになつたんだに。むしろ（古瀬良男氏・古瀬右京氏）が若い頃に、一度やったことがあるけえど、ちいっとは川すじが変わつたに。

〔『上村村誌・民俗篇』三四〇〜三四一頁〕

(e) 此田の若宮

此田では、昔大水の時、ノコギリが上流から流れてきたので、上流のコビキが死んだと思われた。そのコビキを供養するために、そのノコギリを祀った。それをコビキ（木挽）様と称し、地の神様と金山様が同じ地に祀っ

である。御宮は安政五年に建てられ、その後明治三六年に建て直された。家のことなら、困ったことは何でも願をかけるということである。これらの神を総称して若宮と呼んでいる。

(東京学芸大学民俗学研究会『遠山の民俗』
一九七九・三三頁)

右に列挙した伝説から、遠山の人々が川に対して豊かな想像力を発揮していたことが分かります。川にはカワランベや大蛇が棲んでおり、淵や巻口（渦巻きになっている所）には人間の理解を超える神秘的な現象が起こり得るという発想が存在していたのです。川ばかりでなく、山の尾根は「グリーン様」と呼ばれる妖怪の通り道とされ、家を建ててはならないとされていきましたし、伐ってはならない木（山の神の「休み木」）や入ってはならない山（「ケチ山」）などがありました。

このような伝説は、自然の力の恐ろしさを伝えるだけでなく、あらゆる資源を利用し尽くそうとする人間の欲望にブレーキをかける役割を果たしていたのではないかと思えます。最近では、自然保護団体やマスコミが「自然との共存」というキャッチフレーズを盛んに使いますが、そのよ

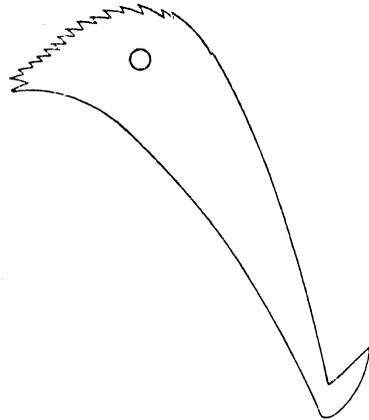


図2 諏訪旧蹟誌に見えるなぎ鎌
(笹本正治『天竜川の災害伝説』より転載)

うな抽象的な言い方ではなく、伝説は身近な地名や出来事を使って、人間にはコントロールすることのできない力が自然に潜在していることを語っています。人間が自然との約束を守り、慎み深さを失わなければ、淵は人間に腕を貸してくれました。しかし、人間は必ずその約束を破ってしまいます。そのような人間の「業の深さ」を伝えている点でも、右のような伝説は今日的な意味を持っているといえるでしょう。

ただし、興味深いのは、(d) の伝説で自然をコントロールしようとする人々の意志が語られている点です。笹本正治氏もこの伝説に注目し、『諏訪旧蹟誌』などの史料を引用しながら、天竜川流域で「瀬分け鎌」とか「なぎ鎌」といわれる呪具が「本来諏訪信仰のなかで風切りの薙い鎌として用いられたものが、洪水の瀬を切る道具として用いられた」(『天竜川の災害伝説』建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所・一九九三・四九頁) ではないかと指摘しています。おそらく(e) の伝説も、そのような信仰を背景にしたものではないかと思われまます。人間は自然の力にただ受け身だっただけでなく、裨宜や木挽という特殊な能力を持った者やその呪具を媒介にして、自らの意志を実現しようと働きかけてきたのだということが分かります。

今日、遠山谷に伝承されている「霜月祭」を含む三信遠の山村に伝承されている湯立て神楽の系統に、中世の諏訪信仰の影響が見られることが多くの研究者によって指摘されています(たとえば武井正弘「花祭の世界」『日本祭祀研究集成』第四巻、名著出版・一九七七ほか)、「霜月祭」の祭儀やその執行者である裨宜の知識には、人々と自

然との関わりのノウハウが集約されているのではないかと思います。

以上、この章では遠山谷の川をめぐる民俗を紹介してきましたが、明治維新後、遠山谷では川と人間との関係を大きく変える出来事が起こりました。伝説の中で語られた自然と人間の営みの均衡を大きく破った、王子製紙の伐採事業とその影響を次の章では紹介していきます。

第三章 近代化の爪痕

— 王子製紙の伐採事業を中心に —

(一) 遠山共有山の前史と共有山騒動の背景

王子製紙の伐採事業について触れる前に、その舞台となった遠山共有山の歴史をごく簡単に紹介し（以下の記述は『南信濃村史・遠山』に収められた「共有山史」に拠っています）、共有山騒動の背景となったかつての村落社会の階層構造とその変化を指摘しておきます。

遠山谷は戦国時代にこの地を治めていた遠山氏の改易（大名としての地位の剥奪：元和三年・一六一七）後、天領となりますが、米がほとんど穫れないため、ヒノキやサワラなどを樽木という材木に加工し、それを年貢として納めていました。それと同時に、遠山の人々にとって樽木は、「塩買木」として遠州や三河方面から塩や綿布、金物や瀬戸物などの生活必需品を得るための交易の手段ともなっていました。ただし、天領となってからは遠山谷の山々は「お留山」とされていきましたので、「塩買木」の伐

採も代官所の厳しい管理のもとに行われていたようです。

しかし、遠山六か村（和田村、木沢村、上村、八重河内村、満島村、鶯巣村）の百姓たちの度重なる嘆願の結果、江戸時代中期には中腹以下の何箇所かが「百姓稼ぎ山」として入山を許可されました。この山林は六つの村の共有林として経営され、六か村の社会的結合の経済的基盤となっていたわけです。

明治維新後、遠山谷は明治四年の「戸籍法」の制定にともない四つの村（和田村、木沢村、上村、八重河内村）に分割され、明治八年「遠山村」に統合されますが、その後、も分村・連合を繰り返して、明治二二年市町村制定の際、「遠山組合村」正式には「和田村ほか四か村組合」というかたちに落ち着きました。新しい村は、戸籍の整備や租税の徴収など、国家行政の末端を担うことになりましたが、新しい村を運営していく財源となったのが、旧遠山六か村の一万町歩におよぶ共有山でした。

ところが、明治一二年共有山が払い下げられると、村は共有山の伐採権を外部の業者に売却してしまいます。これは、当時の村の有力者たちががひそかに行なったもので、その後転売された伐採権を獲得した王子製紙が明治二九年から大規模な伐採事業を開始したために、一般の村民に共

有山売却の事実が知れ、村を二分する大騒動に発展していくのです。

村の有力者が共有山を勝手に売却するというのは、今日の我々の目には、かなり乱暴な話と映るのですが、江戸時代からの階層関係や権力構造が残存していた当時の状況を考えてみなければなりません。幕末から明治初期の遠山地方の村々の社会構造については、竹内利美氏らの『南伊那農村誌』（山村書院・一九三八）によって、概略を知ることができません。

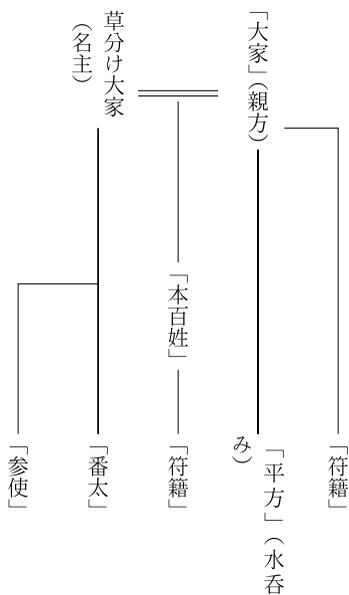


図3 幕末から明治初期のむらの階層構造
 (竹内利美ほか『南伊那農村誌』慶友社復刻版、15頁より)

図3を御覧ください。これは、当時の村の階層関係を簡単に図式化したものです。各集落には、「大家」と呼ばれた草分けの家があり、むらの大半の土地や山林を所有していました。したがって、一部の「本百姓」を除いた大部分の百姓たちは、奉公人や小作人として「大家」に従属せざるを得ませんでした。図中の「符籍」が奉公人に、「平方」が小作人に当たります。「大家」はまた「親方」とも呼ばれ、「親方衆」が交代で名主や組頭をつとめながら、集落の上のレベルである近世村の政治・経済を取り仕切っていた、というのが基本的な枠組のようです。この階層構造は明治時代にも受け継がれ、共有山騒動を引き起こす原因になっていたのです。

ただし、親方と子方の経済的な支配は従属関係は、近世末にはかなり変動していたようです。『南伊那農村誌』は子方である「符籍」の経済的な上昇を次のように指摘しています。少し長くなりますが、引用してみましょう（慶友復刻版・一二頁）。

奉公人として長く忠実に勤めた者が主家から分家分として別家するとか、或は他所者が或家の分

家分として土着した者等を『符籍』と称した。(中略) 符籍は始終主家へ出入りして主家の耕作にも当たった。多年その耕作に当たっていたものであるから、よくその事情に通じていて農事等については却って詳しかったので、これに任せ切りの家もあった。つまり『鋤頭』と違って、主家の耕作の差配に当たった者が多かったのである。この主家への奉仕は一定の規定はなく、主家の命によって何時も来て働かねばならず、結局労力の半分程度は主家に奉仕することになるのであったと言う。その代り、符籍は主家の土地を借りて小作したが、年貢は極めて大雑把な約束で、殆ど無償に等しく、粟十俵の収穫があれば一俵も持って行けば事足りたという。然し、符籍へ与える土地は荒地や山畑等の粗悪なものに限っていた。つまりは、小作地のみは自己の労力は必然的に余剰を生じるように仕組まれていたので、それが主家のために提供されたのである。随って、符籍の小作地は、謂わば主家への労働の代償として余暇に自作することを許された分余地と見る可きであって、決して賃貸の觀念による小作地ではなかったようである。

符籍の地位は極めて低いものであって、(中略) 随って、その生活はひどいものであって、食料の如きは山の

もの七分に穀類三分と言った程度のものさえ多かったのであった。然し、それ故に心がけ次第で却ってかなりの財産を作ることも出来たのであった。麦が五合あれば、一合くらいを食料として、他の四合は残して金銭にといった程度の極端な節約をして、粒々辛苦永い間に零細な貯蓄を積んだ者もあったそうである。又一方交際費等は全く要らず、暇には他所へ賃稼ぎに出たりすることもあったのであるから、相当の身代を作るものもあった理である。

この記述から、親方と子方のあいだの地主・小作関係というのが、近代のそれと異なる性格を持っていたことが読み取れます。子方は親方に対する労働奉仕の代償として、粗悪な土地の開墾、おそらくは焼き畑などをしながら、ある程度自由な経済活動を行うことができたのではないかと想像できます。江戸時代の後期には、山向こうの城下町・飯田で元結などを中心にした地場産業が発達してきて、和紙の原料である楮コウゾやコンニャク玉が遠山地方から飯田に大量に送られていたことが当時の文書資料(『南信濃村史・遠山』所収の佐藤家文書など)によって分かります。このような市場経済化の動きに対して、子方たちが積極的に適

応していく回路が、近世の親方―子方システムのなかにすでに用意されていたということに注意しておきたいと思えます。そして、共有山騒動が起こる明治時代の中期には、かつての親方衆の専制に異議を唱える勢力が成長していったのです。

(二) 王子製紙の伐採事業と人々の生活の変化

さて、問題の王子製紙の伐採事業は、明治二九年から大正一一年まで二十数年間にわたって行われました。王子製紙が遠山谷の山林資源に目をつけたのは、日清戦争の勃発（明治二七年）で紙の需要が急増し、静岡県佐久間町に工場を新設していたからです。いったいどれくらい原木が伐り出されたのか、詳しいことはよく分かりませんが、パルプの原料となる樅や榎ばかりでなく、共有山の良材はあらかた伐り尽くされたといわれています。山は荒れ、土砂崩れや水害が頻発したのはすでに述べたとおりであり、共有山の地上権の解消をめぐる裁判は戦後まで続けられたのです。

しかし、王子製紙の伐採事業は、それまで出稼ぎに頼るしか現金収入の道がなかった遠山の人々にソマ（伐採人夫）やヒヨウ（運材、流送人夫）として生計を立てること

を可能にし、和田や木沢、上町には木曾や飛驒、土佐や紀州などから出稼ぎに来た人夫たちの生活をまかなう商店や料理屋、宿屋が次々と出来て、大いに賑ったと伝えられています。また、一日四回合わせて一升のメンパ飯を食べたといわれる人夫たちの胃袋を満たすために、大量の米が遠山に持ち込まれ、馬による交易によって生計を立てる人も出てきました。

王子製紙の伐採事業を記憶しているのは、現在八〇歳以上の人々です。下栗の胡桃沢友明さん（明治四二年生れ・故人）もその一人で、胡桃沢さんは小学校を出てすぐヒヨウ小屋の「手伝い坊」として働いたそうです。小屋の炊事をするカシキを助け、弁当を運んだりするのが主な役目だったそうです。外来の人夫たちは「ワタリ山師」と呼ばれていましたが、彼らは林業の先進地帯の出身者であることから、ソマ組やヒヨウ組の責任者である「庄屋」になる者も多くいたそうです。木材の運搬具である木馬（きんま）を遠山に持ち込んだのも「ワタリ山師」たちであり（大脇直泰「伊那谷の木馬」『日本民俗文化大系一三巻・技術と民俗（上）』小学館・一九八六によれば、富山の山師）、鋸も土佐のものがよく切れるので、胡桃沢さんはその後も人を介して土佐の鋸を入手し続けたといっています。

伐採事業の最盛期には千五百人以上の山師が来村したといわれていますが、「ワタリ山師」たちのなかには遠山で結婚して定着する人もおり、明治時代中期から大正時代にかけての「王子製紙時代」は、遠山の人々が外部の人々と接し、新しい技術や文化を吸収していった時代だといえるでしょう。『南信濃村史・遠山』によれば、小学校舎の新築、道路の拡張、村議会制度の整備などが行われたのがこの時期であり、外部の事業家の流入に刺激され、さまざまな遠山谷開発構想が議論され、実際に和田水力電気や飯田方面と遠山を結ぶ竜東索道の開発なども行われました。

このように、王子製紙という外部の大資本に刺激されるかたちで、遠山谷の近代化は急速に進められていったのですが、大正一一年王子製紙が伐採事業を中止したことで大きな転機を迎えます。

(三) 近代化の爪痕

王子製紙が伐採事業の中止を決定したのは、石川県七尾に新工場を建設し、シベリア材を使い始めたからでした。二十数年間にわたって遠山の経済に活気を与え続けてきた王子製紙の撤退は人々にとって大きな痛手となりました。当時の村長・遠山嘉明が王子製紙に送った嘆願書には、当

時の状況が次のように記されています（『南信濃村史・遠山』二〇五頁、部分抜粋、句読点は引用者）。

貴株式会社ノ組合村ニ創業サルルヤ直接間接ノ恩沢ハ村ヲ向上発展セシメタリ。而シテ事業ヲ廃止サルルヤ百事衰運ニ傾ク。其ノ盛ナリシ時ハ商家ハ軒ヲ列ネ旅舎モ賑ヒ料理店ハ歌舞ノ声ヲ聞ク。今ヤ悲哉昔日ノ觀ヲ留ムルナシ。（中略）突然事業ヲ中止セラレント伝フルヤ村民色ヲ失ヒ憂愁ニ閉サル。其ノ全ク廃止セラルルヤ落胆極度ニ達シ、人心ハ一時沈滞シ其ノ語ル所悲觀ノ辞ナラザルナシ。其結果労働者ハ意ヲ決シテ家ヲ捨テテ樺太ニ或ハ台湾ニ出稼ヲナシ、商家ハ墨頭ノ寂寞ヲ嘆ジ職ヲ他ニ需メ、飲食店ハ自カラ鎖シテ転業ヲ余儀ナキニ至リ、（後略）。

また、事業中止が決定された大正一一年は、正月早々と田で大火があり、夏の水害がそれに追い討ちをかけた年でもありました。多くの人々が復興のために負債をかかえていた時期に王子製紙の撤退が知らされたのですから、その打撃の大きさは想像にあまりありません。後藤総一郎氏は『遠山物語』（信濃毎日新聞社・一九七九、一三九頁）のな

かで、王子製紙の入山がもたらした功罪を次のようにまとめています。

王子製紙による山の開発は、そのまま遠山の里に、さまざまな開発をよびおこしていった。

だがその一方、こうした急激な経済の活性化は、遠山の里に、いくつかのまたマイナスの文化をも生み落としていったのであった。

たとえば、山林労働者の、山で働きながら、ときおり町に出たときは一挙に豪遊するという気風は、村人の生活に「ハデ」な気風を感染させ、あるいは「とったかみたか」という言葉に象徴されるような、その日暮らしの気質を、遠山の里に一般化させもしていった。(中略) こうした気風は、今日も、なにか他所から入ってきた事業にすがろうとするいわば「他者志向」の精神として、いまだ強く生きているといえよう。

後藤総一郎氏はまた、多くの山林労働者の来村がもたらしたマイナスの文化のひとつとして、「チョボイチ」というサイコロ賭博の流行をあげています。実は、私が遠山に通い出した昭和五〇年代の後半、下栗の津島牛頭天王社で

は三月一五日の祭礼終了後、「あと祭り」として「チョボイチ」が行われていました(現在は行われていません)。

一から六までの数字の書かれた紙の上に現金を置き、大小三つのサイコロの目を賭け合う賭博でしたが、目の組み合わせや賭け率の計算が複雑で、簡単にやり方が分かるものではありませんでした。先ほど「王子製紙時代」を語る貴重な話者として紹介した胡桃沢友明さんは、この「あと祭り」の常連で、「最近の若い連中は計算ができませんからチョボイチもやらんようになって」と冗談まじりに言っていました。胡桃沢さんと同じ世代の女性のなかには「小さい頃、鞠つきをしながら、巡査が来るのを見張っていたことがある」と言う人がいましたし、かつて郵便配達夫をしていた山口儀高氏も、その制服から「よく巡査と間違えられて難儀した」と笑いながら話してくれました。

このような「チョボイチ」話は、現在では「昔話」になりましたが、山地の限られた土地に楮こうぞや蒟蒻こんじやという投機性の高い換金作物を栽培し、その収入が市場の変動に左右されがちだった山村の生活のある側面を物語るものではないかと思われまます。猟師をしていた人が「昔は、ひと冬に熊を三匹も仕留めれば、あとは遊んで暮らせた」と語るように、山村の経済感覚は、計画的な水田農耕を主体とする平

地の「常民」の保守的な感覚とは異なっていたのではないだろうか。山地の厳しい自然環境は、とても人間がコントロールできるものではありませんでしたし、山村の生活には外部の市場経済の動向を敏感に読み取り、さまざまな作物や生業を組み合わせていく柔軟性と「したたかさ」が必要だったのだと思われまます。

もっとも、明治時代の中期から大正時代にかけての「王子製紙時代」は、その「したたかさ」が裏目に出て、山村の生活の基盤である山の自然そのものが破壊されてしまいました。次章では、まず王子製紙の伐採事業に対する反対運動が高まっていた時期に語られていた伝説を取りあげ、次に戦後の郷土史家の活動による霜月祭伝承の変化を指摘し、最後に最近の遠山常民大学の活動などを通して形成されつつある「祭の里・遠山郷」の新たな「ふるさとイメージ」を概観してみようと思います。

第四章 霜月祭の伝承と

ふるさとイメージの創造

(一) 共有山騒動と一揆伝説

明治二九年、王子製紙の大規模な伐採事業が始まったとき、村の有力者たち（親方衆）の共有山売却の事実を知った村人たちは、村民大会を開いて村議会の不当決議取り消しを求める行政訴訟を起こしました。村内は山林売却派と訴願派に分かれて対立し、一時騒然とした空気につつまれたといわれています（『南信濃村史・遠山』、一九六〇、一九七頁）。また、これと同じ時期、遠山谷は赤痢の大流行という危機にみまわれます。『南信濃村史・遠山』によれば、

明治二八年六月 患者四四三名、死者一〇名。

明治三〇年六月 患者三二九名、死者七六名。

明治三一年八月 患者四五三名、死者一〇三名。

という被害でした。後藤総一郎氏によれば、明治二九年の夏にも赤痢が大流行した（被害状況は不明）ようであり、四年間で村の人口の一割に当たる人々が死亡するという惨状だったようです（『遠山物語』、一三三〜一三三頁）。また『南信濃村史・遠山』巻末の年表によれば、明治二七年と二九年には天然痘が大流行しており、さらに明治三〇年には伐採事業の影響で大水害が起こっており、遠山は壊滅的な危機に瀕していたのです。

ところで、遠山谷では、百姓一揆によって殺された領主・遠山土佐守とその一族の怨霊を鎮めるために霜月祭が始まったという伝説が語られてきました。昭和四〇年代から五〇年代にかけて霜月祭の綿密な調査を行った民俗学者・茂木栄氏は、かつてこの伝説が共有山騒動と結びつけられて語られたのではないかと推測しています（『祭伝承と結集の源流―南信濃遠山谷―』『まつり伝承論』大明堂・一九九三）。茂木氏の議論を紹介する前に、一揆伝説の内容を確認しておきましょう。

左の④は、市村威人『遠山氏史蹟』（長野県史蹟名勝天然記念物調査報告第一三摺別刷・一九三七）所収のもの、⑤は『上村村誌・民俗篇』所収のもの、⑥は私が昭和五四年に下栗で採話したものです。

④ 里人伝へて曰く、土佐守様はお取立て中々にきびしく百姓は逆もたまらず、そこで六ヶ村及鹿塩、大河原の百姓は寄り寄り密議を凝らした。其会合の場所は第一回は盛平山（和田村）の北麓漆平野、第二回には須沢（木沢村）の奥待舎であつたと云ふ。かくて遠山様の悪政を公儀に直訴することとなり、其訴状の作製を三津島村（満島）の内折立寺の住職長老に托した。義気に富める長老は直に承諾して之が首謀者となつた。百姓党は其書を以て御公儀へ直訴し、遂に其願意は聞届けられ、遠山氏は其領地を没収せらるることとなつた。然るに、之と前後して遠山氏は其直訴の張本人を詮議して折立長老なるを知り、長老を飯島（南和田村）に要撃し瀕死の重傷を負はしめた。是に於て、多年鬱積したる百姓の不平は忽ちにして一揆となりて発し、暴民は一挙和田城を屠り、遠山氏を亡ぼすに至らしめたのである。

（市村威人『遠山氏史蹟』二二頁）

⑤ 遠山土佐守は、百姓に対して過酷な政治をやつたんだに。年貢の取り立てをするにしても、一升五合の架をつくって、一升架だちゅうて取り立てをした。また医学にも興味のある人だったようで、妊娠中の腹身おんなの解

割をしたりしたんだ。そこで、百姓たちは、下栗の奥の方にあるたよりが島っちゅう所に集まって、一揆の相談をして土佐守が参勤交代の時に、大鹿村のおけやっちゅう所の崖の上から吊りこもの中に石を入れて待ち伏せしとって、一行が通るときにこもを切って、土佐守を殺しちまったんだに。その時に、土佐守の娘だけは家来が一宮（愛知県）に逃がしたっちゅうことだ。一宮は、生前の土佐守が、遠山じゃちっとも米がとれんっちゅうて訴えて、遠山の他に領地として与えられた所だっちゅうことだ。その子孫に当たるっちゅう人が、昭和五年頃訪ねてきたことがあるに。

（『上村村誌・民俗篇』三二七頁）

◎ 土佐守は、百姓から年貢の取り立てをするのに、二升五合入る枡を作って、それを一升枡だと言って取り立てをしていた。困った百姓は、家来のうち何人かを味方につけて、刀の目釘を抜いたり、鉄砲を水に漬けさせておいてから、一揆を起こしてお城（和田の龍淵寺）を攻めた。武器が使えないので城はあっという間に落ち、土佐守はわずかの家来と一緒に山の中に逃げ込んだ。

何日も歩いて、池口岳を越えてナギに出たとき、真ん

前に下栗の部落が見えた。しばらく人家を見ていなかった土佐守は、下栗を都のように思い、懐かしがったということだ。そのナギは「都ナギ」と呼ばれている。それからさらに奥へ奥へと聖岳のほうへ逃げ、山の獣を獲ったり、木の実を採ったりして暮していた。土佐守が一時身を隠していた場所を「頼りが島」といい、その奥にも「面平」といって土佐守の家来が木地師になって住み着いたところがある。祭りに使われる八社の面はそこで作られたもので、土佐守や仲間の家来たちの顔を思い出しながら作った面だといわれ、どれも悲しそうな顔をしている。

土佐守は山の中を逃げるうちに、大鹿村の鹿塩へ通じる地藏峠で百姓たちの待ち伏せにあい、石子詰めで殺されたそうだ。それから三年間、赤腹（赤痢）が流行り作物も不作が続いたので、百姓たちは土佐守の祟りだと噂し合い、その霊を慰めるために祭りを始めた。それが今の霜月祭の起源だといわれている。

（大川長男氏・明治四三年生・浮葉調査）

遠山谷の一揆伝説にはこれ以外にもさまざまな異伝がありますが、〈遠山土佐守の悪政〉↓〈一揆の画策と実行〉

↓〈土佐守の逃走〉↓〈大鹿村での土佐守殺害〉↓〈崇りとしての疫病の流行〉↓〈崇り鎮めとしての霜月祭の始まり〉という一揆伝説の主な要素は、右の三つの伝説にほぼ出揃っています。

茂木氏がまず注目するのは、④で語られた「折立の長老」のエピソードです。④の伝説については市村威人氏が「遠山地方の和田、八重河内を除きたる平岡村折立及木澤以北の村に行はるる説」という注をつけています。なぜ和田や八重河内での伝説が語られなかったのかは分かりませんが、市村氏が遠山谷を訪れた昭和一〇年代には広く語られていた伝説のようです。茂木氏は次のような事実をあげながら、この伝説が共有山騒動の進展のなかで再解釈された可能性を指摘しています（茂木栄・前掲書、五二頁）。

共有山問題がくすぶり続けている最中、大正六年に折立青年団が発起人となって、旧遠山六ヶ村の有志二七六名という多数人々が寄付を集め、越訴に失敗し義に殉じた折立長老の三〇〇回忌として石碑を建てはじめた。これは、花崗岩で造られ、高さ二メートル三〇センチの立派な石碑である。大正六年に起工され、同八年に竣工した折立長老は、遠山の人々にとって忘れてはならない義

人である。特に共有山問題で遠山が揺れている時期に、二六七名もの寄付を集めて、二メートル三〇センチという巨碑を建てた人々の特別な意識を見逃してはならない。

ここで茂木氏が指摘する「人々の特別な意識」とは、団結して不当な為政者をしりぞけたという過去の歴史の記憶であり、その記憶を共有山騒動のなかで呼び覚まそうとする意識にほかなりません。

次に茂木氏が注目するのは、次のような伝説です。

④ 遠山氏は富国の要諦は林樹の保護にあるとの見解により、「一樹を折るものは直ちにその首を斬るべし」との法を布き以て林地を保護し、栗の木は殊に愛護させた。

この徹底した林業政策と永遠の富国政策は領民に歓迎されなかった。領民は直に収穫をあげることができない切り畑に走り、数十年後の収益を期待する林業とは、氷炭相容れなかったのである。このことにより遠山氏は領民の怨恨と反抗を買い、それが爆発して百姓一揆となり一族離散の結果となった。しかし、遠山氏は徒らに誅求を事とする暴君ではなかった。心あるものは遠山氏の百年の

大計ある政策に信服していた。領民はその後暴挙を悔い、その冥福を祈り年々の供養を怠らないのである。

右の伝説①は、『南信濃村史・遠山』（一〇六頁）に収められたのですが、出典は市村威人氏の『遠山氏史蹟』です。市村氏は先にあげた②を「遠山氏の暴政論」、①を「遠山氏の失政論」として紹介し、遠山氏没落をめぐって二つの伝説が伝えられていたと報告しています。茂木氏によれば、この伝説には林業を軽視した領民の反省、すなわち木を切らせなかった遠山氏に対する百姓一揆を不適当なものであったとする心情が語られており、「逆に言うなら樹木を伐採することにこそ怒りを爆発させるべきである」という主張が盛り込まれている」（茂木栄・前掲書、五三頁）と解釈しています。

さらに茂木氏は、一揆伝説が霜月祭の起源伝承となっている（◎参照）ことに注目して、「明治二十七年からはじまる天然痘・赤痢の大流行と、それに重なる共有山騒動は関連した出来事として認識され、共有山騒動から一揆伝承を、天然痘・赤痢の大流行からは、祟りを想起させ、天然痘・赤痢の大流行（祟り）を仲立ちとして、百姓一揆伝承と霜月祭の中にあつた死霊祭の部分が融合したと言える」

（茂木栄・前掲書、五五頁）という結論を導き出し、霜月祭に登場する面の多くが明治年間に奉納されたものであることを傍証としています。

ただし、この点に関しては、最近、飯田美術博物館が実施した各神社の面の総合調査の結果、江戸時代の末期にすでに多くの面が奉納されていたことが判明しています（桜井弘人「仮面からみた遠山霜月祭について」『飯田美術博物館研究紀要』第三号・一九九二）。また、茂木氏が引用した①の伝説についても、採話者の市村氏が「平岡村宮澤直作氏の説」と注記しており、この伝説が遠山谷の人々の結果を可能にするほど広く語られていた伝説なのかは実証できません。もっとも、茂木氏の議論はその問題点が指摘される一方、伝承がそれを伝える社会の影響で変化し得るという視点を提供したことで、先駆的な業績として評価されるべきものといえるでしょう。遠山氏の伝説や霜月祭の伝承が最近の「村起こし」のシンボルとなっている現状を考えると、伝承が社会を結果させるといふ茂木氏の議論は新たな意義を持っているように思われます。

（二）郷土史家の活動と霜月祭伝承の変化

昭和五四年一二月、遠山谷のいくつかの神社ではじめて

霜月祭を見学したとき、まず驚いたのはカメラを手にした観光客の数の多さでした。祭のクライマックスである面の登場する時間ともなると、少しでもよい撮影位置を占めようとすると神社の中は身動きが取れない状況になります。南信濃村、上村両村が発行するパンフレット類には、「祭の里・遠山郷」というキャッチフレーズとともに必ず面や湯立ての写真が掲載されています。毎年一月になるテレビでは霜月祭のニュースが流されますし、県内はもとより愛知、静岡の近県ばかりでなく、東京や関西方面からもバスをチャーターして訪れるグループがあり、霜月祭の宣伝はそれなりの効果を上げ続けているようです。

しかし、その一方で、地元の人からは「祭を見に行っても、よその衆ばかりで、ちっともおもしろくない」という声を聞くことがあります。祭の雰囲気高めめる「よく舞うぞ、どこかのトトサはよく舞うぞ」とか、「ウソコでマツルと焼けつくぞ」という囃し言葉も、地元の人が少なくとは力がありません。また面を被った若者が飛びはねる「四つ舞」でも、彼らを受け止める人が少なく、その後の「ヨーセ、ヨーセ」という掛け声に続く押し合い（地元の人々は霜月祭をかつて「押し祭」と呼んでいました）も、カメラマンの列を縫うように行われていて、祭場全体の一

体感が得られる場面が少なくなっているような気がします。

昭和二八年、岩波映画製作所が制作した映画「山のまつり」を見ますと、神社の梁の上にまで子供たちが上り、祭をながめている姿が映し出されています。そして、「四つ舞」の場面などでは、祭を行う者と見る者が一体となり、独特の高揚感を生み出している様子が生き生きと伝わってきます。かつては外部の見物客も少なく、昭和の初めに遠山を訪れ、霜月祭に関する初めての報告（信州遠山の霜月祭）『民俗芸術』四二六・昭和五年）を行った西角井正慶氏などは、「背広を着たよその若い衆がおる」といって神社の外に引きずり出され殴られたという逸話も残っています。

過疎化の進行で人口の減少と高齢化が進む遠山の人々にとって、祭の存続はそれだけで厳しい問題です。年に一度の祭ではありますが、限られた人数で準備から進行、後片づけを行い、それぞれの家では客をもてなさなければなりません。せっかく祭を見に行っても、観光客ばかりで神社に足が遠のいた人も少なくないようです。もっとも、観光客のなかには祭をよく知っている人もいて、囃し言葉をまねしたり、「四つ舞」や押し合いに積極的に参加する人も

います。私も含め外部からこの祭を見に来る人々にも、ただ単にカメラやビデオを写すだけでなく、祭に参加し、その雰囲気高める努力が必要ではないかと思われまます。

ここで忘れてはならないのは、今日のように霜月祭が国の重要無形民俗文化財に指定され、外部にも知られるようになる以前から、祭の保存と研究に努めた地元の人々がいたことです。戦後、全国的に進められていた生活改善運動の影響で、遠山でも霜月祭の期日の変更や時間の短縮が検討されたことがあったといえます。また、封建的な習慣を打破しようという戦後の雰囲気のおかげで、祭そのものを軽んじる風潮もあったようです。遠山の人々が毎年行われるこの祭にどんな歴史があり、それがいかに貴重なものであるかということに気づくのは、昭和三〇年代に入ってからのことでした。先ほど触れた岩波映画「山のまつり」の撮影や池田弥三郎氏、三隅治男氏らの調査（昭和二十七年）に刺激され、昭和三十一年、地元の小・中学校の先生方が中心となって霜月祭調査委員会編の『霜月祭―現在行われている霜月祭の研究―』というガリ版刷りの記録が出版され、翌三二年には、上村の医師・岡井一郎氏が『遠山郷「霜月祭」』（天章文化新聞社刊、のちに『信州上村霜月祭』と改題、上村・昭和四一年）が出版されています。

当時の状況を山口儀高氏は次のように語っています
『伊那民俗学研究所報・伊那民俗』第二〇号、二〇四頁・一九九五）。

昭和二八年に岩波の映画撮影があった時が、祭とのかわりのはじまりです。ひとつ年上の岡井一郎先生にさそわれ、祭りにのめり込んだのです。若い時はあまり祭りには参加しなかった。郵便局へ行ってしましてね。その頃の祭りは地元の人たちばかりで低調だったように思います。個々人の舞い方が幾分かずつ違っていました。昔気質というか、舞い方なんてなかなか教えてくれなかった。「盗め」と言われたものです。それを岡井先生が統一した。舞が次に移る時のぎこちなさを直して恰好良くした。舞うほうも「こりゃいいぞ」なんて言って……。岡井先生がお医者さんだったから出来たんですね。若い人たちもついてきました。

特に岩波映画の練習の時に直したんです。若い人たちを集めて教えたのは岡井先生でしたが、その後子供に舞を教えることをはじめたのは私です。（中略）

祭りのために私は、各家族をまわって子供を貸してくれんか、と頼みました。その頃は装束も何もなかった。

全部造ったんです。女の子しかいない家庭もあるので、女の子のための羽揃いを考えたりもした。白い着物で金の烏帽子（えぼし）、赤い袴をはかせてね、これはよかったです。

（桜井弘人・寺田一雄インタビュー、村沢聡まとめ）

現在では、祭の後継者不足から、小・中学校で「ふるさと学習」の一環として舞の練習が行われていますが、当時は反対する人も多く、「児童憲章に照らして告訴するぞ」などと言われたこともあったそうです（同右・インタビューより）。

郷土史家である山口氏と一般の人々との意識のずれは、霜月祭の起源伝承となっている一揆伝説の解釈にも現れています。山口氏は以前、市村威人氏の『遠山氏史蹟』や自ら解読した古文書から、遠山氏の没落は相継ぎ争いを口実にした取り潰しであって、伝説に言われているような百姓一揆はなかったという内容の文章を上村の公民館報に載せようとしたのですが、掲載を拒否されることがあるようです。昭和六〇年九月、上町の診療所で開かれた高齢者学級でも、山口氏は黒板に年表を書き、古文書のコピーを広げながら、一揆を否定する講演を行いました。私もその場に居合

わせたのですが、その場では山口氏の熱弁に圧倒された参加者たちも、帰りの車中などでは、「わしは確かに一揆があったと聞いたんだが」とか、「一揆がなかったとしたら、何のために今まで祭りが続いてきたんだ」という不満をこぼしていました。多くの人々にとって、一揆伝説の否定は、先祖代々受け継がれてきた霜月祭の存在理由を否定するものであり、学問的な理論の上ではともかく、心情的に受け入れがたいものだったようです。

ただし、昭和六〇年代前半に調査を行った秋葉弘太郎氏の論稿（「遠山土佐守伝承と霜月祭－伝説と郷土史研究者の解釈との交錯－」『信濃』四五・一九・一九九二）によれば、山口氏の説の影響を受け、最近では一揆を否定する霜月祭の起源伝承が語られるようになっていくようです。たとえば、和田の竜淵寺の住職でもある盛文雄氏は、次のような伝説を秋葉氏に語っています（秋葉弘太郎・前掲論文七四一頁、平成四年八月・秋葉探訪）。

まあ、遠山には一揆はなかったとゆうことだ。遠山氏のね、この霜月祭りとゆう祭りがあるんですよ、遠山には。このお祭りの中でね、前々からあったお祭りでもって、大宮、ええ、大殿だとか若殿だとかゆう、遠山氏一

族のお面が出て、神として祀られてると、神として住民が祀られてるといことは、畏れて祀るのかあるいは懐しがって祀るのか、とゆうことなんだが、畏れて祀るってゆうことよりもむしろね、遠山氏の時代のほうが良かったんだと、幕府の時代よりもね、直轄になった時よりも、遠山氏の方が温かみのあった政治ができていたんじゃないかとゆうことが想像されるわけなんだけどもね、そで、神として祀るってことはそうゆうことじゃないかと。

遠山氏の菩提寺の住職である盛氏の語りにはそれなりの思い入れがあることが想像できますが、秋葉氏によれば、山口氏とともに郷土史家として有名な下平正春氏や木澤八幡社の氏子総代をつとめる齊藤七郎氏なども、一揆を否定する祭の起源伝承を語っているようです。少なくとも古文書に興味を持つような人々にとって、文書に記録されていない一揆は単なる伝説に過ぎず、一揆不在説が古文書学習会などを通して広がっているのでしょう。郷土史家以外の多くの人々は現在でも一揆伝説を語っているものと思われませんが、一揆伝説が語られるにしても、「これは記録にはないんだが」というような注釈がつけられる可能性が高く

なっていくのではないかと思われます。

ところで、霜月祭の起源伝承には、遠山氏や一揆伝説とはまったく関係ない言い伝えが二つあります。一つは、和田に伝えられるもの、もう一つは、上町に伝えられるものです。これらは今日あまり語られることのない伝承で、地元の人々にもほとんど知られていない伝承です。『南信濃村史・遠山』（五八〇～五八一頁）に記載された伝承は左のようなものです。

① 和田では、伝承によると、代々祢宜であった尾の島村沢家の先祖に榊大夫という人がいて、この人が、承久元年（一二一九年）に、京都からこの神楽を伝え、後に、上村、木沢、満島に伝えたとのことである。従って、神楽歌の中の繰り返しの詞が和田では「アンヤハーハー」（暗夜を意味する）であり、木沢、上村では「ヤンヤハーハー」（夜明けを意味する）であるという相異も、そこに起因すると言う。

② 上村の正八幡社は、文亀元年（一五〇二年）以後、明治までの間に五回の火事に見舞われ、また代々宮元祢宜として仕えた家も火事で全焼という事があり、文書は焼

け残りのもので半ば伝説的といながらも、次のような伝承が残っている。

承平年間（九三二～九三七年）、名を隠した熊野本宮の仙人が、この村の佐久麻呂という者の家に一夜の宿を乞い、宿の主人の求めに応じて、木火土金水の五神をこの地に迎え、祀りの方法も教えた。仙人は、佐久麻呂にすすめて一緒に京に上り、宮廷の儀式、神社仏閣の儀式を見させ、覚えさせ、最後に賀茂神社で湯立ての儀式も見させた。帰郷する時、男山八幡を分霊して主宰神にするように言い、又、五個の面を持って社に納めるように言った。郷里に帰った佐久麻呂は、早速男山八幡宮を祀り、湯立てを行ったのが、この祭りの最初である。

後、戦国時代（一五〇〇年代）に、遠山氏がこの地を領有することになった時、遠山氏の先祖の守護神鎌倉鶴ヶ岡八幡を迎えて合祠し、両八幡と称した。その後、遠山氏は家督争いが原因で衰亡し、元和三年遂に滅亡。その遠山氏一族の霊を八社の神として元和八年（一六二二年）この両八幡に合祠し、以後祭神は変わることなく、祭りは、益々盛んとなって、今に続いている。

右の二つの伝承は、いずれも祢宜の家に伝えられたもの

であり、おそらく祢宜をつとめる者だけに伝承されてきたのではないかと考えられます。⑤の伝承は、先に紹介した郷土史家・岡井一郎氏が『信州上村霜月祭』の冒頭に記した長い伝承の一部を要約したものです。岡井氏は祢宜をつとめていた宇佐美虎之助氏が入手した古文書を解読し、自らの解釈や若干の脚色も加えて文章化した（『上村村誌・民俗篇』の霜月祭の章は岡井氏の手で書かれたもので、より詳しい伝承が記載されています）と書いています。ここでは岡井氏の説をいちいち紹介しませんが、要するに、霜月祭は遠山氏滅亡以前から行われていた祭であるという点を明らかにしたことが、後の遠山常民大学における霜月祭研究の土台となっているという点を指摘しておきます。また、学問的な意義と同時に、岡井氏の研究は「一揆がなかったとしたら、何のために祭をやっているのか」という一般の人々の疑問に答えるヒントを提示した点でも意義深いものといえます。先に触れた秋葉氏の論稿は、郷土史家の解釈と伝説の「交錯」という、どちらかといえば混乱した状況を指摘していますが、自らも伝承者のひとりである郷土史家の解釈は、研究というかたちの新たな伝承創造の営みではないかと思われれます。少なくとも、最近の遠山常民大学を中心にした霜月祭研究の成果を見ると、伝

説と郷土史家の解釈はその隙間を埋めつつあるように思えるのです。

岡井氏の問題提起を受け継ぎ、古文書の発掘や面の実証的な研究、近隣の三信遠地方に伝承される同系統の祭との比較という地道な作業から、霜月祭の深層や遠山氏の歴史を明らかにしつつある遠山常民大学の活動とその成果をこの章の最後で紹介してみたいと思います。

(三) 遠山常民大学の活動と霜月祭研究の深まり

昭和五二年に創設された遠山常民大学は、「生活者である『常民』が身銭を切って学ぶ」という理念を貫いて、行政の支援を一切受けず、村人の手だけで運営されてきたユニークな「大学」です。残念ながら、現在は「休止中」(事務局長・針間道夫氏の談)ということですが、当初の目標である一〇年を大きく越え、つい最近まで月一回の定期学習を続けてきたのですから、その継続の意志とエネルギーには頭が下がります。

常民大学創設の発起人のひとりである明治大学講師(当時)後藤総一郎氏は、その前年に刊行された『南信濃村史・遠山』の編纂顧問でもあり、数年間にわたる村史編纂の過程で村人の間に高まっていた郷土史への関心の高まり

を引き継ぐかたちでこの大学が創設された経緯を、著書『遠山物語』(信濃毎日新聞社・一九七九)や『郷土研究の思想と方法』(伝統と現代社・一九八一)のなかで明らかにしています。後藤氏と同世代で、青年会OBによる「あらくさ会」というサークルを作り、林業史や農業経済の学習会を行っていた小沢一太郎氏(故人)や野牧治氏らが帰村していた後藤氏を訪ね、酒呑み話から村人の手による勉強会の開催を決めたのが九月末。一〇月には運営委員会を組織し、ポスターやちらし作りを行い、十一月二日には開講にこぎつけてしまったのですから、その間の発起人たちの興奮と行動力をうかがい知ることができます。

初期の常民大学は、鎌倉から月一回遠山を訪れる後藤氏を主宰講師として、「近代日本の思想と民衆」「村の歴史―その現在・過去・未来」「ムラの生活思想史」「柳田国男を讀む」を主題にした学習会であり、山田宗睦氏、谷川健一氏、三隅治男氏という中央の著名人や武田太郎氏、大沢和夫氏、向山雅重氏という伊那谷の研究者、またのちに常民大学における霜月祭研究の指導的役割を果たした武井正弘氏などをゲストに迎え、活発な議論が行われたようです(昭和五二年から五七年の五年間の活動については、遠山常民大学運営委員会編『遠山常民大学の五年』に詳しく報

告されています)。常民大学の活動はいち早くマスコミにも取り上げられ、県外からも多数の受講者が訪れ、地元に参加者は、村にいながらにして中央の学問の成果を吸収するとともに、外部の人々との出会いを通して、遠山谷の歴史や文化の魅力を再認識していくことができました。遠山常民大学の成功はのちに全国に飛び火し、現在では一〇か所と同じような常民大学が開かれ、連合大会も開かれています。

柳田国男の『遠野物語』の舞台となった岩手県遠野市における観光を軸にした「村起こし」の動きや遠野常民大学の活動を文化人類学的な視点から参与観察した川森博司氏(国立歴史民俗博物館)は、「民話の里」という外部から与えられた「ふるさとイメージ」を地元の人々が積極的に利用し、『遠野物語』の学習会や注釈づくりを通して、地方の生活者が全国的な文脈の中で自らの生活実践の精神的基盤を獲得していく過程を報告しています(川森博司「ふるさとイメージをめぐる実践―岩手県遠野の事例から―」『岩波講座・文化人類学・第一二巻・思想化される周辺世界』岩波書店・一九九六)。その報告の冒頭で、川森氏は「ふるさとイメージ」というキーワードを次のように説明しています(二五八頁)。

「ふるさとイメージ」は地方の村落部の人々に、ある意味で肯定的な価値を与えるものであったが、彼らを古い慣習のなかにつなぎとめようとするものでもあった。古い慣習から逃れることは、地方で暮らす多くの人々の願いである。しかし、中央からは、古い慣習から脱却しつつ地方で自分の拠点をしっかりと暮らしていくというイメージは、与えられなかった。したがって、将来の見通しを得るためには、彼ら自身がそのようなイメージをつくり上げねばならないのである。

中央と地方の力関係は歴然としている。地方で暮らす者が、中央とは無関係に、自分が前の世代から受け継いだものを現代社会に生かしていくきっかけを得ることはむずかしい。そのとき、外部から与えられた「ふるさとイメージ」は、もともと都会人の思いこみであってもそれを自分たちの利益になるように利用できれば、地方で暮らす拠点を獲得するための糸口になる可能性を持っている。しかし、そこでは、外部から押しつけられた枠組みを受け入れることと自分の拠点から生活を組み立てていくこととの間のせめぎあい問題になってくる。

遠山の場合、外部から与えられた「ふるさとイメージ」は、「秘境・遠山郷」であり、「霜月祭の里・遠山郷」でした。私が調査を続けている下栗では、南アルプスを間近に望む雄大な風景を「日本のチロル」（市川建夫氏の命名による）と表現していますし、最近多くの観光客が訪れるようになった八重河内の「やまめ荘」周辺は「せせらぎの里」と呼ばれています。いずれも、観光客を遠山に引き寄せるうたい文句ですが、そのなかでも「祭の里」という「ふるさとイメージ」は、年に一回行われるだけの霜月祭それ自体の観光効果には限界がありますが、中央の研究者との交流や地道な学習を通して、霜月祭の伝承と保存という生活者の実践の精神的基盤の形成という面では大きな効果をもたらしています。

初期の遠山常民大学では、主宰講師である後藤総一郎氏の専門である近代民衆史や柳田国男研究を主題にしていましたが、次第に後藤氏の手を離れ、遠山氏や霜月祭に関する研究に主題を移して学習会が行われるようになっていきました。その時期の常民大学の活動に指導的な役割を果たしたのが、花祭をはじめとする天竜水系の民俗芸能の研究に多大な成果を残している武井正弘氏です。武井氏の指導のもとで進められた、常民大学の発起人のひとりである野

牧治氏の研究や、遠山出身で飯田美術博物館の学芸員をつとめる桜井弘人氏の最近の研究は、遠山氏の来歴や霜月祭の深層を古文書や面、舞の形態などの具体的な資料ににとづいて明らかにしつつあります。

野牧治氏は、遠山常民大学の第四期修了記念発表会（昭和五八年）で、遠山氏の来歴に関する発表を行い、天竜村平岡の旧家に伝わる古文書や遠山氏の家系図から、遠山氏は天正年間（一五七〇年代）に、高崎方面へ一族とともに移封されたことがある、という新説を発表しました。この発表は、『信濃毎日新聞』でも取り上げられ、「遠山常民大学・出始めた実り／初の本格的個人研究」という記事が掲載されました（一九八三年一月二〇日）。その後、『歴史手帖』一二巻一号（名著出版・一九八四）に、「遠山氏系譜と霜月祭」という論稿を発表し、遠山氏の系譜が鎌倉権五郎景政につながり、上村の祭に登場する「源王」「政王」という面は、源頼朝、北条政子をさし、鶴岡八幡宮の荘園であった「江儀遠山荘」で、源氏の先祖を祀る御霊信仰が展開された名残りが霜月祭に伝わっているのではないかという説を発表しています。また、最近では、『中日新聞飯田ホームニュース』に連載された「古道と伝説」をまとめた私家本『秋葉街道・遠山郷むかし』（平成五年）や蒐集

した古文書や写真などをまとめた『信州伊那谷遠山郷』を第二号まで自費出版しています（平成八年、第三号まで刊行予定）。

一方、桜井弘人氏は、平成元年から飯田美術博物館が行った各神社における面（おもて）の総合調査のデータを「仮面からみた遠山霜月祭について」『飯田美術博物館研究紀要』第三号（一九九二）で発表しています。この調査は遠山常民大学の全面的な協力を得て行われ、それまで宗教的な理由から嚴重に保管され、調査がタブー視されていた面の製作年代や作者などを明らかにした画期的なものでした。桜井氏によれば、遠山谷の一〇か所の神社に所蔵される面は、引退面四面を含む二九一面であり、木沢に残る元和、寛文年間のものがもっとも古く、江戸時代中期や後期以降のものも含まれますが、多くは江戸時代末期以降、とりわけ明治時代のものが大半を占めるようです。

桜井氏は、祭に登場する面の一一の舞型に注目し、各神社における霜月祭の面の構成を〈上町タイプ〉〈下栗タイプ〉〈木沢タイプ〉〈和田タイプ〉の四つに分類し、それぞれの舞型を比較した結果、〈上町タイプ〉の「神大夫・婆、八社、四面、天伯」の一五面による構成をが原形にもっとも近いものであり、他のタイプはそこから派生した

ものであるという結論を導き出しています。また、遠山氏族の面とされている「八社の面」についても、先の野牧氏と同様に八幡信仰の影響を指摘し、面の行道を行う鎌倉御霊神社の神幸祭（遷宮祭）と遠山で行われる「御殿入り」が非常によく似た儀礼であることを写真入りで説明しています。そして遠山における霜月祭の歴史の変遷を、鶴岡八幡宮の荘園時代に行われた御霊鎮めの儀礼や源氏の祖霊祭祀↓領主化した遠山氏の祖霊祭祀の重層↓遠山氏改易後、天正八年の遠山新助殺害事件や改易前後のお家騒動にともなう対立が代官の厳しい取り立てや疫病流行によって想起された百姓一揆伝承の発生、かつての領主・遠山氏の御霊鎮めの儀礼の誕生↓江戸時代末期における村内の神々の行道面の追加、という順序で推測しています。

また、最近では、釜の数や面の構成、式次第などで他のタイプとの違いが大きい〈和田タイプ〉の祭における舞の所作に注目し、同じ霜月祭のなかでも、このタイプの祭には諏訪系神楽の影響が強く、天竜村坂部の冬祭の儀礼と共通点が多いという点を指摘しています（「舞からみた遠山霜月祭について―和田タイプの祭りを中心として―」『飯田美術博物館研究紀要』第六号・一九九六）。

以上、右に紹介した野牧治氏や桜井弘人氏の研究は、百

姓一揆伝説の否定によって生じた祭伝承の空白（「一揆がなかったとしたら、むしろは何のために祭をやっているのか」という疑問）を遠山氏の来歴や霜月祭の深層に広がる中世の宗教的世界を再現することで埋めようとしているといえます。その意味で、二人の研究は前節で紹介した岡井一郎氏や山口儀高氏をはじめとする郷土史家の流れをくむものともいえませんが、霜月祭や祭伝承の保存・記録に重点をおいた従来の郷土史家の研究とは一線を画すものです。

中央における宗教史や芸能史の研究成果を吸収し、霜月祭の歴史やその背景を全国的な視野で位置づけ、その価値をアピールしようとする二人の研究が、「祭の里・遠山郷」という「ふるさとイメージ」を活性化していることは確かですが、今後、二人の研究が一般の人々にどのようなかたちで共有されていくのか、という点については、もう少し時間の流れが必要ではないかと思われます。現在、上村と南信濃村で建設が予定されている「霜月祭伝承館」（仮称）に、二人の研究がどのようなかたちで生かされるのか、興味を持ってながめたいと思っています。

なお、桜井氏は遠山の出身ではありませんが、厳密な意味では遠山常民大学の受講生ではありません。むしろ後藤総一郎氏と同様に、講師として常民大学に参加しているわけ

ですが、桜井氏によれば、常民大学での講義は受講生との質疑応答を通して新しい情報を得る、資料収集の有効な機会となっているそうです。桜井氏は、『伊那民俗研究所報・伊那民俗』に、霜月祭以外の年中行事の報告、祢宜や郷土史家へのインタビュー、さらに遠山ばかりでなく、下伊那の民俗芸能についても数多くの報告を発表しており、今後の成果が期待される研究者の一人であることを、最後に断っておきます。

第五章 ささまざまなふるさとイメージの模索

平成八年、本書執筆のため久しぶりに遠山谷を訪れた私は、飯田市と上村を結ぶ矢筈トンネルの開通によって、国道一五二号線沿線の景観が大きく変わっていることに驚きました。トンネルを出てすぐ「そば打ち道場」の建物が目に入り、道沿いの何か所かには、休憩所や仮設トイレが設けられています。その横に立てられた「祭の里・秘境・遠山郷」という大きな看板には、面や湯立てのカラフルな絵と並んで、神社までの道順と祭の日程が書き込まれています。また、現在行き止まりとなっている国道一五二号線の早期開通をめざそう、と書かれた看板も数が増えたような気がします。

学生時代毎年のように通った下栗では、公民館は「コミュニティセンター」と名を変え、二階建ての大きな建物に変わっていましたし、昭和五年「休校」となった下栗分校の建物も「ロッジ下栗」というペンション風の宿泊施設に変わっています。しらびそ高原と下栗を結ぶ林道も

開通し、モトクロス用のオートバイが列をなして通り過ぎるようになりました。

上村役場の発行するパンフレットには「南アルプスの秘境『遠山郷』・かみむら」という見慣れたキャッチフレーズの横に、「豊かな生活の中で失ってしまった人間としての力強さを取り戻すため、毎日がアウトドアライフだったあの頃の知恵を学ぶために、自然にもっとも近づくことのできる高原をめざそう」というコピーが書かれています。

おそらく委託を受けた外部の業者が書いた文章だと思いますが、このオートキャンプ化構想、もっと進めて言えば、「遠山谷リゾート構想」（実際、温泉の試掘も行われているようです）を進めるうえでは、懸案となっている国道一五二号線の全面開通がぜひともなし遂げられねばならない課題となります。私はまだ見たことはありませんが、八重河内の「せせらぎの里」の近くには「三遠南信観音」が建てられ、静岡県との県境となっている兵越峠ひょうこつたけでは、南信濃村と静岡県水窪町の青年団とによる「国盗り合戦」を模した綱引き行事が行われているようです。

ある意味では、江戸時代の秋葉街道のにぎわいを再現しようとする構想だと思われませんが、かつての人馬の道と違い、自動車の道は道を開けるだけでは多くの車が通り過ぎ

るだけの便利な抜け道になってしまいます。観光客を遠山に引き寄せ、俗な言い方をすれば、お金を落させるためには、遠山に行かなければ触れることのできない何か、よく言われるプラスチックの魅力が必要です。先に引用した上村のパンフレットには、「山国生活体験イベントに参加し、農業体験・山菜・キノコ採り・田舎料理教室などを通して、村の人々との親睦を深めるのも楽しい」という文章も書かれています。つまり、自動車道の開通によって村人の暮らしが豊かになることと同時に、かつての山村の古い文化が保存され、都会の人々のもとめる「田舎らしさ」がなくてはならないということなのです。上島と木沢の集落の手前に新しくトンネルが掘られ、まっすぐになった道、おそらく将来は静岡県に通じるはずの道を和田に向かう車の中でそんなことを考えました。

一方、遠山谷の中心地である和田には、「一億円ふるさと創生資金」を使った「遠山郷土館・遠山城」が建設されていました。その入口には次のような説明が掲げられています。

遠山郷の領主遠山氏が多年居住していた長山城からこの地に移り和田城を築城したのは、天文の末（一五五〇）

頃のことであった。元和三年（一六一七）に遠山氏は家督相続のもつれから家督不取締のかどにより改易となり徳川直轄領となったため武家諸法度一國一城令により和田城は廃止された。

その後慶安元年（一六四八）龍淵寺に朱印地として下附され慶安四年寺の境内地となっていたがこの度この城跡に一般村民が利用する郷土館和田城を建設した。

平成二年十月吉日

前章で紹介した野牧治氏は、自著『信州伊那谷遠山郷』第二号で、「*（判読不能）之末流鎌倉権五郎景正より拾六代末遠山藏人住し、遠山和田村龍淵寺ハ御屋敷跡也」と書かれた古文書を写真入りで紹介していますが、「遠山氏はもともと江戸時代は旗本でありましたので、石詰みの城と云う事は論外で屋敷・館であったと考察出来ます」と、暗に遠山城建設を批判しています。「史実どおりに館を再現しても、見栄えが悪いから、ああなったんだろう」と野牧氏は説明してくれました。

また、遠山城の庭には、徳川家康と対面する遠山土佐守景直の銅像が建てられています。これは市村威人氏が『遠山氏史蹟』のなかで報告した次のような史実および伝説に

もとづいたものです（一七〜一八頁）。

慶長の初年、景直は三河国岡崎に至り、初めて家康に謁見するを得て、遠山領を安堵するの恩命を得た。（中略）

土佐守頼才あり、奇行を演出して領国遠山の山間瘠薄なるを知らしめ、本領以外の加増を瀛ち得たることを伝へてゐる。（中略）土佐守が家康に謁見の時、酒肴午餐を賜はりけるが、土佐守は喫飯の折左手にて前方の見えざるまでに茶碗を覆ひながらに食し、食を終りたる後、茶碗の縁に箸を渡しておいた。土佐守退出の後、家康は人を以て土佐守のこの不審なる挙動につき、尋ね問はしめられた。土佐守これに答へて、これはいづれも遠山の習慣にて何等他意あるにて候はず、遠山は山間峡谷の間に有つて水田少く米を産せず、上下共に麦又は粟を常食とす、故に貴人の前にて食するときは耻ぢて之を隠す習慣なり、野人礼に習はず、先刻思はず知らず斯る不作法をなし恐懼至極の旨を答へた。翌朝再登城すべきの命あり、至れば、家康より昨日の尋問の義いかにも気の毒の至りである爾後上穂領千石兵糧として加増し取らす。また食後箸を茶碗の上におくは世にも珍らしき作法な

り。今日より其方家紋を其形に象り \odot と致す様との恩命あり、土佐守は面目を施したと伝へられる。

右の伝説は、遠山氏の家紋 \odot の由来として伝えられるものです。和田城のパンフレットには、「遠山郷土館の完成を記念し、ふるさと創生事業のアイデアのひとつとして製作されました」と書かれています。家康と対等に渡り合い、郷土に恩恵をもたらした土佐守の姿を「村起こし」のシンボルとしたものといえるでしょう。ここでは、百姓一揆によって殺されたという陰惨な伝説は触れられません。前章では、郷土史家の研究が霜月祭の起源伝承である一揆伝説を否定していく過程を報告しましたが、まったく別の文脈で一揆伝説が語られなくなる可能性を感じました。さて、和田城の内部ですが、一階には板張りのホールがあり、壁には来村した著名人の写真やサイン色紙が貼られています。二階は霜月祭の展示館で、湯立ての様子を再現した人形と面のレプリカが壁一面に展示されています。ここでは、霜月祭の由来やクライマックスが約一〇分間のスライドにまとめられ、解説付きで上映されています。その解説（和田城で販売されていた小冊子『信州・遠山郷』南信濃村・霜月まつり』より引用）には、たとえば、

旧暦霜月は一年のうちで最も日照時間が少なく、生あるものすべての生命が弱まるものと人々は考えていた。それは自然現象ばかりではない。人の命も同様である。人の魂が極限まで弱まった時、人々は魂を再生させるために神々を招き、神聖な湯をいただき、自らの身に浴びることにより魂を蘇生させることを願った。これが湯立ての起源である。この神の魂を分けていただく祭りを「みたまのふゆ」といい、やがて季節の名も「冬」と呼ぶようになった。

というように、折口信夫の説がそのまま語られています。映し出される写真は確かに「遠山の」霜月祭ですが、解説は「霜月祭」一般の説明です。ただ一か所だけ、遠山氏族の面舞の写真には、

霜月まつりには、遠山氏一族の面が登場する。江戸時代には領主の遠山氏一族を打ち滅した百姓らが、その祟りを恐れ、霊を慰めるために一族を神として祀った。伊勢方面から伝来した湯立神楽に、後に鎮魂儀礼が加えられたことが、遠山の霜月まつりの特徴で、古くは「遠山様

の祭り」、「死霊祭り」などとも呼ばれた。

という解説が付けられています。この解説から、このスライドショーの作製に、前章で紹介した霜月祭に関する最近の研究成果が利用されていないことが分かります。むしろ、折口信夫風の独特な言い回しを使うことで、祭の神秘性を演出することを優先しているように思えます。その演出の流れのなかで、陰惨な一揆伝説はかえって効果的です。庭の遠山土佐守の銅像の前で感じた感想とは逆の展開にとまどいを感じましたが、よく考えてみると、私自身もこの伝説にロマンを感じた一人です。霜月祭の保存、研究という文脈のなかで否定されてきた一揆伝説は、観光という文脈のなかで、むしろ霜月祭の魅力を高める効果を発揮するのではないのでしょうか。現在、両村で建設が予定されている「霜月祭伝承館」（仮称）の展示に一揆伝説がどのようななかたちで取り込まれていくのか、注目してみたいと思います。

最後に、昭和六二年、南信濃村に建設された高齢者福祉施設デイサービスセンターについて触れておきます。長年にわたって民生委員をつとめてきた高根忠男氏によれば、昭和五〇年代、独り暮らしの老人の自殺が相継いだことが

この施設建設のきっかけになったそうです。それまで人口三万人以上の自治体でないと、デイサービスの対象にならないとされていたのを、地元の代議士に働きかけ、粘り強い交渉の結果、建設にこぎ着けたということです。南信濃村のデイサービスセンターは、地元の主婦層に雇用機会をもたらし、過疎地域における高齢者福祉のモデルケースとして注目されました。そして、マスコミに取りあげられたり、外部から視察団の訪問が相継いだことで、「福祉の里」という新しいふるさとイメージを生み出したのです（南信濃村『福祉の里・ユートピアみなみしなの』）。

デイサービスセンターの建設による「福祉の里」というふるさとイメージの創造は、高齢化が進む村の現実を正面から見据え、少しでも暮らしやすい村をつくろうとする生活実践から生み出されたもので、外部の視線を意識した観光や「村起こし」によるふるさとイメージの創造とは方向性が異なるものです。村の内部で積み重ねられた生活実践が国や県の行政を動かし、それが同じ問題を抱える外部の人々に注目されるようになり、その視線を通して、今度は村の多くの人々に内面化されるようになりました。「福祉の里」というふるさとイメージの創造は、村内無料の「福祉電話」の開設やコンピューター通信による在宅看護の開

始（平成九年四月から）という新しい動きを生み出しつつあります。

この章では、上村で進められている、南アルプスの景観を利用したオートキャンプ化構想（あえて命名するならば、「アウトドアの里」）、南信濃村の「遠山郷土館・和田城」建設に見られる「村起こし」のシンボルづくり、デイサービスセンター建設による「福祉の里」というふるさとイメージの創造を取りあげてきました。ここではあまり詳しく触れられませんが、「せせらぎの里」やその周辺における静岡県との交流を進めるさまざまなイベントも、国道一五二号線の全面開通という遠山谷の未来を考えるうえで欠かせない重要な課題と深い関係があり、今後、大きな展開を見せそうです（図4参照）。これらの新しい動きと古くから遠山谷のふるさとイメージの中心となり、人々のアイデンティティの核心となってきた「祭の里」イメージがどのように重なり合い、新たなふるさとイメージを生み出していくのか、今後も注意して見守って行きたいと考えています。

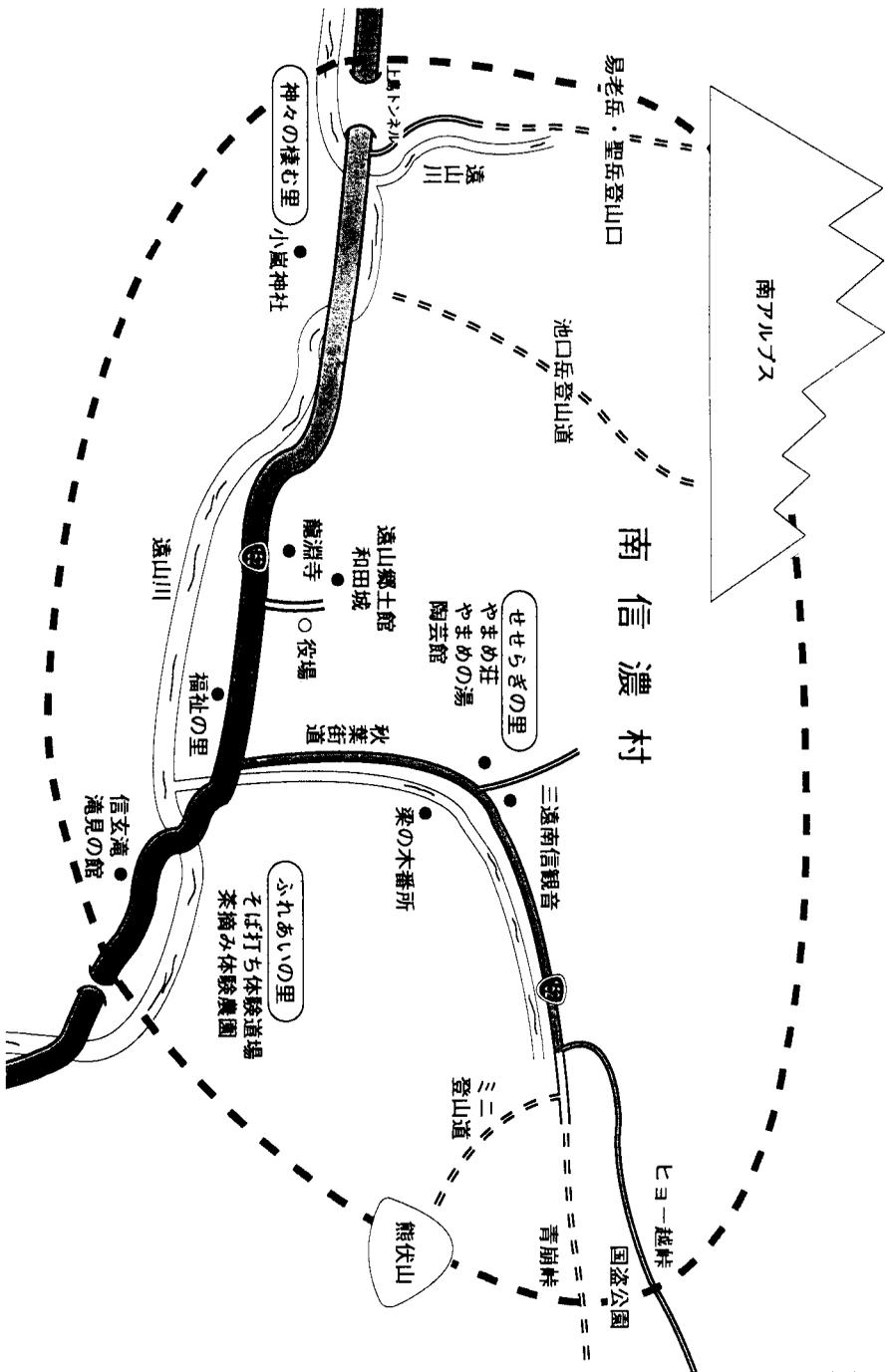


図4 「南信濃村ロードマップ」に描かれたふるさとイメージ

おわりに

この本は、水や川を中心にした遠山谷の自然と人々の生活との関係を描写した第一章・第二章、王子製紙の伐採事業による近代化の爪痕、そしてそこからの再生という課題を抱えた遠山の人々の生活実践の精神的基盤となった霜月祭伝承およびその変化を扱った第三章・第四章、現在遠山谷でさまざまなかたちで模索されているふるさとイメージの諸相を報告した第五章という三つの部分に分かれています。執筆を終えて、あらためて気がついたのは、この本の構成がそのまま私自身の関心の移り変りと重なっていることです。古老の聞き書きを中心に古い伝承の掘り起こしを行っていた学生時代の調査、近代化と村落社会の変容という問題を考えるようになった韓国滞在中の思索、久しぶりに訪れた遠山谷の変貌に驚くとともに、新しいふるさとイメージを模索するさまざまな動きが見えてきたこの頃という変化です。

遠山の人々の生活実践が外部の世界の動きと密接な関係

を持っているように、私自身の研究も最近の民俗学や文化人類学の学界動向と無関係ではありません。本書のタイトルや後半（第四章、第五章）の分析で使った「ふるさとイメージ」というキーワードも、最近、「観光による文化の再創造」というテーマで活発な学会発表や執筆を行っている、大学院時代の僚友でもある、川森博司氏の研究から借用したものです。また、貴重な調査ノートを私に託してくれた南真治君をはじめとする当時の信州大学教養部文化人類学ゼミナールの皆さん、遠山で地道な研究を続けていらっしゃる山口儀高氏や野牧治氏、突然の来訪にもかかわらず、こころよくインタビューに応じて下さった高根忠男氏や遠山常民大学の針間道夫氏、貴重なアドバイスをいただいた飯田美術博物館の桜井弘人氏に、この場を借りて感謝の意を表したいと思います。さらに、いちいちお名前をあげることはしませんが、学生時代からお世話になり続けている下栗の方々をはじめとする遠山の方々には、今後も遠山での調査を続けていく旨を申し上げて、感謝の言葉に代えさせていただきます。

なお、筆の遅い私を最後まで励ましてくれた、本シリーズの編集者・北原優美さん心から御礼を述べさせていただきます。ありがとうございました。

浮葉 正親 (うきは まさちか)

1960年生まれ。長野県南安曇郡豊科町出身。

信州大学人文学部卒。大阪大学大学院博士課程単位取得退学。

現在名古屋大学留学生センター助教授。専攻は民俗学・文化人類学。

主要論稿など

「遠山谷下栗の山の神信仰（上・下）」『信濃』39-3（1987）

『信濃』43-7（1992）

「むら争いのフォークロア」『比較日本文化研究』1（1994）

遠山川流域の民俗とふるさとイメージの創造

平成9年3月15日 発行

企画 発行	建設省中部地方建設局 天竜川上流工事事務所	長野県駒ヶ根市上穂南7-10 〒399-41 ☎ 0265-82-3251
著者	浮葉正親	名古屋市天白区平針住宅16-D-412 〒468 ☎ 052-803-5874
編集	(有)北原技術事務所	長野県南安曇郡豊科町豊科4574-16 〒399-82 ☎ 0263-72-6061
印刷	双葉印刷(有)	長野県松本市城東2-2-6 〒390 ☎ 0263-32-2263

「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

南アルプス、中央アルプスの高峰にはさまれて、伊那谷を北から南へ貫流する天竜川。その流域では、あり余るほどの自然の恩恵に浴して、人々は豊かな暮らしを育んでいます。しかし、名にし負う“暴れ天竜”はひとたび豪雨が見舞えば、日々の穏やかな表情を一変し、猛々しい牙をむき、人々の暮らしを脅かしてきました。

天竜川上流工事事務所では、天竜川が“母なる川”として優しい微笑をたたえ続けて欲しいと願う地域の人々の切なる気持ちに応えるため、半世紀にわたり、地域の人々の多大なご協力のもと自然の脅威と闘いながら河川改修事業や砂防事業に取り組んできました。しかし、まだまだ危険な箇所は多く残されており、絶えず流域の変貌をみつめ、河川管理施設の整備と維持管理を図っていかねばなりません。

また、余暇を求める人々の欲求や環境に対する意識の高まりに伴い、治水、利水の役割だけでなく、貴重な水と緑の空間として人々に潤いを与え、様々な生物の生息・生育環境を形成するものとして、その役割が大きく見直されるとともに、河川が地域の風土と文化を形成する重要な要素であることが再認識され、地域の個性を生かした川づくりが求められています。

そこで、目指すべき21世紀の社会を、災害、水資源、自然環境、地域の個性という四つの視点から「健康で豊かな生活環境と美しい自然環境の調和した安全で個性を育む活力ある社会生活」と位置づけ、洪水や渇水という非日常的現象における被害の軽減対策に加え、日常においても生物などの生息・生育の場であること、散策・スポーツなどの利用の場であること、地域の風土を構成する重要な要素であることを同時に認識し、治水、利水、環境のそれぞれの施策を展開することによる「365日の川づくり」が重要です。

「語りつぐ天竜川」は、こうした考え方に立ち、天竜川に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の方々に天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立てたいと思い発刊するものです。思い起こせば、昭和61年度の初版を発刊してから早10周年を迎え、今回発刊する2巻を合わせて46巻になります。これも偏に天竜川を愛する地域の方々、その気持ちに応えようとお忙しい中ご協力頂いた執筆者の方々の賜物です。

なお、ご執筆頂いた方々には、自由な立場からお考えを披瀝していただいていますので、建設省の見解とは異なる場合がありますことを付言します。

建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
所長 野田 徹

「語りつく天竜川」目録

- | | |
|-----------------------------|--------|
| 1. 伊那谷の気象 | 米山啓一著 |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害 | 北澤秋司著 |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み | 鈴木徳行著 |
| 4. 総合治水の思想 | 上條宏之著 |
| 5. 総合治水と森林と | 中野秀章著 |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷 | 松澤武著 |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷 | 今村真直著 |
| 8. 村境は不思議だ | 平沢清人著 |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷 | 倉沢秀夫著 |
| 10. 諏訪湖の御神渡り | 米山啓一著 |
| 11. 理兵衛堤防 | 下平元護著 |
| 12. 近世 天竜川の治水 — 伊那郡松島村 — | 市川脩三著 |
| 13. 川筋の変遷 — 天竜川と三峰川の場合 — | 唐沢和雄著 |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性 | 宮崎敏孝著 |
| 15. 天竜川の橋 | 日下部新一著 |
| 16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井 | 北原優美編 |
| 17. 天竜川の魚や虫たち | 橋爪寿門著 |
| 18. 天竜川のホタル | 勝野重美著 |
| 19. 天竜川流域の村々 | 松澤武著 |
| 20. 小渋川水系に生きる — 人と水と土と木と — | 中村寿人著 |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防 | 森岡忠一著 |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術 | 吉澤孝和著 |
| 23. 土木技術と生物工学 — 生きものを扱う技術 — | 亀山章著 |
| 24. 戦国時代の天竜川 | 笹本正治著 |
| 25. 天竜川の水運 | 日下部新一著 |
| 26. 惣兵衛川除 | 市村威人著 |
| 27. 紙芝居 開墾堤防 — 下伊那郡豊丘村伴野 — | 竹村浪の人著 |
| 28. 昭和36年伊那谷大水害の気象 | 奥田穰著 |
| 29. 天竜川の淵伝説 — 『熊谷家伝記』を中心に — | 笹本正治著 |
| 30. 天竜川の源流地帯 | 赤羽篤著 |

31. 東天竜 三浦孝美 共著
仁科英明
32. 天竜河原の開発と石川除 塩沢仁治 著
33. 伊那谷は生きている 松島信幸 著
34. 天竜川の災害伝説 笹本正治 著
35. 天竜川の災害年表 笹本正治 編
36. 天竜川水運と樽木 村瀬典章 著
37. 水辺の環境を守る 桜井善雄 著
38. 諏訪湖 — 氾濫の社会史 — 北原優美 著
39. 河川工作物と魚類の生活 中村一雄 著
40. 天竜川上流域の過疎問題 山口通之 著
41. 資料が語る 天竜川大久保番所 松村義也 著
42. 天竜川上流 河辺の植物と植生 関岡裕明 著
43. 水利開発にみる中世諏訪の信仰と治水 藤森明 著
44. 横川山巡覧記 — 『辰野町資料第87号』より — 辰野町教育委員会編
赤羽篤校訂
- (以上既刊)
45. 天龍川の鳥たち 福与佐智子 著
46. 遠山川流域の民俗とふるさとイメージの創造 浮葉正親 著
- (発刊中)